



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2011

報告書

日 時：2011年11月19日(土)～21日(月)

場 所：財団法人キープ協会清泉寮

主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援：環境省、文部科学省、国土交通省、林野庁
経済産業省、山梨県、日本環境教育学会

協 賛：アサヒビール株式会社、株式会社損害保険ジャパン
J-POWER電源開発株式会社、NTTジーピー・エコ株式会社
株式会社日能研

参加者：188名



公益社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2011

目次

開催趣意	1
スケジュール	2
清里ミーティング これまでの実績	3
1日目 開会式・全体会1	
開会式	10
全体会1	11
パネルディスカッション	15
2日目 3.5時間ワークショップ	19
2日目夜 全体会2-1 「改正環境教育法」を学ぼう(環境省)	40
2-2 「JEEF虎の巻～活用術お教えします!～」	41
オプションプログラム	
環境教育プレゼンテーション	46
早朝ワークショップ	51
当日募集ワークショップ	52
3日目 全体会3・閉会式	
全体会3 「椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション」	56
閉会式	58

開催趣意

今年で通算25回目となる「公益社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング2011」を、今年も11月19日(土)～21日(月)の3日間にわたり、財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催いたします。

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育があります。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切です。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人(または団体)がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要です。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPOなど環境教育の現場で働く人々同士のつながり=ネットワークを大切に、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えております。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、このミーティングを開催いたします。

特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であることです。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っています。

テーマ

このミーティングは、主に下記の2点を全体のテーマとしています。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場
～人と人、思いと思いが出会うことで、新しいことが動きはじめます～

今年の特徴

通算25回目となる今年のメインテーマは、「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」広きにわたる環境教育活動の中に、柱の一つとして自然学校というものがあります。東日本大震災直後、自然学校のスタッフたちはいち早く現地に入り、全国から届く支援の物資を被災地に送り、志願したボランティアの方たちと共に被災地での活動に入りました。3月17日には自然学校の人達を中心にRQ市民災害救援センターが発足し、広瀬敏通総本部長、佐々木豊志東北本部長を中核にして、宮城県登米市を中心拠点に石巻から気仙沼の間の数百の小さな避難所を訪ね細やかな支援活動を続けて来ました。この迅速な動きが出来たのは、自然学校が持つ「野外活動の力」「コミュニケーションの力」「ネットワークの力」の3つの力があつたからだとも言われており、これらは環境教育の根本とも言えるものです。また、震災後次々と被災地に立ち上がったボランティアセンターは、持続可能な地域づくりの拠点である自然学校としての機能も、期待されるようになりました。今回の事例として自然学校の復興への取り組みを広瀬敏通さん、佐々木豊志さん、畠山信さんの3人を迎えてお話いただき、そうした動きを企業や社会がどのように支援し関わって行くことが出来るのかを、CSRの専門誌「オルタナ」編集長の森撰さんを交えて話し合います。また、他にも復興に関してどのような課題があり、環境教育に携わるそれぞれの立場でどのような役割が果たせるのか、参加者全員で意見交換を行います。

また、「環境教育プレゼンテーション」では、たっぷりと時間をとって、皆様から活動の最新情報を発表していただきます。各地で環境教育を実施している企業や行政、自然学校の中で、今最も大事な環境教育のテーマは何か、どのような課題、新しい挑戦があるのかを発表し合い、共有します。そして、それぞれの活動を理解し、刺激を受け合いながら、これからの環境教育活動につなげていただきたいと思います。

スケジュール

●1日目：11月19日（土）

10:30～	受付開始
11:30～12:15	初参加者対象オリエンテーション（自由参加）
13:00～15:30	開会式 全体会1 パネルディスカッション 「これからの日本の復興に環境教育がどのような役割を果たすのか」
15:30～16:20	休憩・チェックイン
16:20～18:00	環境教育プレゼンテーション
18:30～20:00	夕食
20:00～20:30	休憩・移動
20:30～22:30	環境教育プレゼンテーション 情報交換会 人と組織の紹介処

●2日目：11月20日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	休憩・移動
9:00～13:00	3.5時間ワークショップ（昼食含む）
13:00～13:30	移動
13:30～17:00	3.5時間ワークショップ
17:30～18:30	全体会2-1 「改正環境教育法」を学ぼう（環境省） 2-2 「JEEF虎の巻 ～活用術お教えします！～」
19:00～20:30	夕食
20:30～21:00	休憩・移動
21:00～22:30	環境教育プレゼンテーション 情報交換会 人と組織の紹介処

●3日目：11月21日（月）

7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:30～11:45	移動
11:45～12:30	全体会3・閉会式「椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション」
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00	解散

「清里ミーティング」これまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について（考え方とその論理）
 - ②自然観察の中に今後とりこんでいきたいもの
 - ③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
 - ④施設運営とコーディネーターの在り方について
 - ⑤自然観察の有料化について
 - ⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しげんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】

前半	①学校と環境教育	後半	①地域・開発と環境教育
	②地域社会と環境教育		②施設と環境教育
	③施設と環境教育		③人づくりと環境教育
	④自然観察と環境教育		④市民・行政・企業・学校の協力
	⑤企業と環境教育		⑤環境教育の目的と方法
			⑥学校と環境教育
			⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
 - ②若い世代に楽しいプログラムとは
 - ③環境教育をうまく経営していくためには
 - ④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
 - ⑤環境教育で村おこしができるか
 - ⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリーン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
 - ③プログラム ④人づくり
 - ⑤施設 ⑥地域開発・村おこし

※この年4月より上記6つの研究部会が発足。

- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
 - ④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：ステイーブン・メドレー（ヨセミテ・アソシエーション会長）

*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発行

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
 - ②New School of Conservationにおける環境教育
 - ③ペンギンリザーブ活動報告
 - ④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
 - ⑤フィールドミュージアムごっこ
 - ⑥環境教育国際セミナーに参加して
 - ⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
 - ②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
 - ③ネイチャーゲーム入門
 - ④もしフィールドでだけがをしたら
 - ⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育 ②地域に根ざした環境教育
 - ③エコツーリズムの可能性とその問題点
 - ④環境教育のプログラム教材開発
 - ⑤指導者養成について ⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
 - ③マインドクロッキー ④パートナーシップへの挑戦
 - ⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
 - ④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
 - ⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
 - ③森の宝箱をつくらう ④地球救出作戦
 - ⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育
 - ④ネイチャートレイル ⑤自然学校
 - ⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり ②行政・自然学校
 - ③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
 - ⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
 - ③環境教育を企画・プロデュースする
 - ④ソフトクリーム姉ちゃんをねえ！
 - ⑤未知なる可能性を求めて
 - ⑥キープ・フォレスターズ・スクールズのプログラム体験
 - ⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
 - ⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
 - ⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算 10 回)

- 日時：1996年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：174人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】 ①自然学校の「事業化」
- ②自然学校でのプログラム
- ③地域振興と環境教育
- ④環境保全活動がそのまま環境教育
- ⑤エコツーリズムの様々な可能性
- ⑥JEEFの法人化など今後の可能性

【ワークショップ】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②ネイチャーエクスポアリング
- ③清里での川の環境教育を考える
- ④「子供であそぼう」についての御紹介⑤元気がでる自然観察
- ⑥環境教育の本質を考える
- ⑦環境教育を企画・プロデュースする
- ⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
- ⑨自然をテーマにしたスライドショー
- ⑩自分への気づきと NGO
- ⑪清里インターネット通信社へようこそ
- ⑫森だくさんの自然体験
- ⑬まちを遊ぼう
- ⑭未知なる可能性を求めて
- ⑮エコビレッジを作ろう
- ⑯アクティビティの“パクリとアレンジやローカライズ”

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、**社団法人日本環境教育フォーラム設立****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算 11 回)**

- 日時：1997年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：170人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／山梨県

【分科会】

- ①環境教育の指導者養成
- ②環境教育の新しいプログラム開発
- ③環境教育とまちづくり
- ④環境教育の情報の発掘と提供
- ⑤企業や行政とどのように紐づくのか？
- ⑥新しい交流集会のスタイル

【WS】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②自然と心・心とひとのコミュニケーション
- ③環境教育の服装計画を考える
- ④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
- ⑤環境教育を企画プロデュースする
- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディープエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)

- 日時：1998年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：176人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【分科会】

- ①公共事業における環境教育の役割
- ②森林・里山における環境教育と地域振興
- ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
- ④動物と関わる環境教育
- ⑤日本型エコツーリズムについて
- ⑥メディアと環境、その先にあるもの

【ワークショップ】

- ①環境教育個人商店を考える
- ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
- ③21世紀のインタープリテーションを求めて
- ④おきらく やまんばの部屋
- ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
- ⑥エコマネーのすすめ
- ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
- ⑧ネイチャーエクスポアリング
- ⑨エコスピリチュアルワークの試み
- ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
- ⑪これまでの50年とこれからの50年
- ⑫川を設計してみよう
- ⑬「おもしろい」を「かたち」にはじめの一步
- ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)

- テーマ：「学ぶ心・育つ力」
- 日時：1999年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【分科会】

- ①自然学校の運営を考える
- ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
- ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
- ④森から見つめる川と海
- ⑤エコツーリズム一歩前へ
- ⑥見つけよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
- ⑦チルデンを越える！
- ⑧教育を考える

【早朝 WS】

- ①カラスのきもち
- ②朝のティータイム
- ③きもちとキモチをつないだら
- ④五感で感じよう清里の自然
- ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)

- テーマ：「原点を見つめよう」
- 日時：2000年11月11日(土)～20日(月)
- 参加人数：171人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【体験 PRG】

- ①野外での救急法を覚えよう
- ②ネイチャーウォッチング in 清里
- ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
- ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
- ⑤竹を使ったものづくり
- ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
- ⑦自分という自然に出会う
- ⑧Frog (カエル)
- ⑨プロジェクト・アドベンチャー

- 【分科会】 ①自然体験活動における体験学習法
②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
③虫を知る・入門
④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
⑤学校ビオトープの可能性
⑥五感を使って楽しみながら自然探検
⑦環境教育とスピリチュアリティ
⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
⑨自然学校のPR活動を考える
⑩Out of Treasure Boxes
⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」

- 【早朝 WS】 ①野遊び手遊び発見隊
②センス・オブ・ワンダーの体験
③地球と私の合作づくり「1枚の葉」
④見て、聴いて、感じて…朝の森でネイチャーゲーム
⑤早朝ジョギングワークショップ
⑥キモチときもちをつないだら

■スライドプレゼンテーション

■JEEF 理事による 3分トーク

【社】日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算 15回)

■日時：2001年11月17日(土)～19日(月)

■参加人数：192人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/農林水産省/林野庁/山梨県

- 【体験 PRG】 ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
③秋の味覚を楽しもう！
④「ほっ♪」となるたき火講座
⑤身体感覚講座
⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
⑦プロジェクト・アドベンチャー
⑧やまねミュージアムへ行こう

【分科会】

- ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きものに関連するもの)を活用する」
②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
③博覧会を環境教育という視点から評価する
④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
⑦小さな子どものための環境教育の「技」をさぐる
⑧地域の昔話を中心にした環境教育
⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
⑩Environmental Education in English
⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
⑫テロ・戦争に関してわかちあう
⑬環境教育基礎講座
⑭GEMSの体験プログラム
⑮自然学校で働くこと
⑯センス・オブ・ワンダー
⑰ネイチャーエクスプロアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ

②早朝ジョギングワークショップ

■スライドプレゼンテーション

■参加者による 3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

【社】日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算 16回)

■テーマ：「胎動」

■日時：2002年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：182人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

■環境教育ミニレクチャー

■ヨハネスブルグ・サミット報告

■参加者による 3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!？」

【ワークショップ】

- ①地域通貨ってなんだらう？
②折り紙を使った環境教育の試み(3)
③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
④環境問題、エコロジカルアートからの試み
⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
⑥体験主義を超えて…プロジェクト・ワイルドの世界
⑦「自然の中で働く男性はオハパチャン度が高い?？」を証明したい!!
⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
⑨ひよこのキモチ
⑩モアイは何を見たか
⑪Environmental Education in English
⑫持続可能な開発と環境教育
⑬森の交響サイン計画づくり
⑭サロンの語り場

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②清里ミニガイドツアーA

③清里ミニガイドツアーB

④モンゴル茶で朝を迎えよう

⑤清里ミニガイドツアーC

■スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2003(通算 17回)

■キーワード：持続可能な開発のための教育

■日時：2003年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：208人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
- ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律
- ・持続可能な開発のための教育(ESD)
- ・スライド&トーク オオロニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
④総合学習へのNPO参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
⑤エコ・ネイションゲーム
⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
⑦科学するココロを育てよう!
⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
⑨野生生物教育の現状と課題
⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
⑪「持続可能な人」づくり
⑫開府 400年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
⑭子育てという環境
⑮地方発! 食農発信!
⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダー

②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2004(通算 18回)

■キーワード：「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前

■日時：2004年11月13日(土)～15日(月)

■参加人数：187人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

・「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前

・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

①エコツーリズムという生き方

②科学と環境教育

③地場産小麦でパンをつくろう！

④環境立国 エコ・ネイションゲーム

⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」

～第1回清里「エコ商品コンテスト」～

⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験

⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)

⑧自然学校の動きと人材養成

⑨環境教育 in 国際協力 最新線！

⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」

⑪酵母を育てて、パンを作ろう！

～酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり～

⑫石器時代に接近！モノはこうして作る ～シエラカップ～

⑬いのちを伝える自然体験 ～自分流健康な生きかたを学ぶ～

⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム

⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)

⑯「1億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

パーム油のはなし ～開発教育入門講座～

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド

■JEEF 公開理事対談

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2005(通算 19回)

■キーワード：「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのように役に立ってきたのか」

■日時：2005年11月19日(土)～21日(月)

■参加人数：221人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会：基調講演、5分間スピーチ、パネルディスカッション

【WS&体験 PRG】

①環境教育基礎講座(午前の部)

②自然学校って何だ？

③学校教育と環境教育

④ボードゲーム型の環境教育プログラム

⑤ひとりひとりの感性で自然を感じとろう

～ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら～

⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証

～セルフガイドシートの評価軸を作ろう～

⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう！

～低学年向けの GEMS プログラムを通して～

⑧森林療法

⑨プロジェクトWE T 体験会(午前の部)

⑩環境教育基礎講座(午後の部)

⑪自然学校の評価に向けた人材養成

⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る

⑬CSR と環境教育

⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは、・・・

⑮里山で音楽会

⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法！ ～過去からの環境の変化を辿る～

⑰プロジェクトWE T 体験会(午後の部)

⑱科学と環境教育 見直そう！あなたのインタープリテーション

～持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②座禅&ヨガ

③清里ミニガイドツアー

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド

■JEEF 活動報告

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2006(通算 20回)

■日時：2006年11月18日(土)～20日(月)

■参加人数：224人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会「日本の環境教育 この20年を振り返る」基調講演

■学長鼎談「大学と環境教育」

【WS&体験 PRG】

①自然学校を事業化する ～20年間に自然学校は何を獲得したのか～

②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える

③あなたにとって食育ってなに？

④環境教育基礎講座

⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム

⑥学びとコミュニケーション ～GEMS プログラムの体験を通して～

⑦ESDの実践のポイントを探る ～みんなで話せばわかってくる!～

⑧森林環境教育のすすめ ～木が好きになるプログラム～

⑨50分プレゼンテーション(午前の部)

⑩企業とNPOとの協働を考える戦略会議

⑪環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る

⑫環境教育と地産づくり

⑬環境教育仕事塾

⑭行政との連携を考える

⑮太鼓で太古に退行するぞ！

⑯木から樹を知る方法 ～木材をIPにいかす～

⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくろう

⑱50分プレゼンテーション(午後の部)

⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す

科学的知識の伝え方

⑳感性?科学?どっちのインタープリテーションショー

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②環境質問 ～答えのない問題～

③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか

④清里ミニガイドツアー

⑤清泉寮 朝さんぽ

■環境ショート映像作品上映会

■今後の戦略会議

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007(通算 21回)

■日時：2007年11月17日(土)～19日(月)

■参加人数：230人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■省庁プレゼンテーション

■全体会：「生物多様性」基調講演

・第3次生物多様性国家戦略が目指すもの

・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

①「生物多様性」の見つけ方・伝え方

～自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～

②行政との協働を考える

③学ぶ環境としてのコミュニケーション ～GEMS とゴードンメソッド～

- ④食育コミュニティをつくろう!
- ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
- ⑥関西発! これからは日本的でいこう!!
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境NPOとの協働を進める戦略会議
- ⑫ESDを広める人のための「ESD入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感 ツリークライミング®の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
③清里ミニガイドツアー
- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008(通算 22回)

- 日時: 2008年11月15日(土)~17日(月)
- 参加人数: 192人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 「日本型環境教育の知恵 出版記念」~日本型環境教育とは~
- 【ワークショップ】
- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境NPOカタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコずもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPOの協働~
- 【早朝 WS】 ①砂鉄から鉄を作ろう! 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③清里の森で宝物発見
④ロシアから渡ってきた鳥と出会しましょう
⑤清里ミニガイドツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009(通算 23回)

- テーマ: 「生物多様性」~環境教育の役割~
- 日時: 2009年11月14日(土)~16日(月)
- 参加人数: 193人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGO から
 - ・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
 - ・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く~全生命の集いワークショップ~
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
- ⑥風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦パーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児~小2に伝える生物多様性 ~生物多様性の形を探る~
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止~注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
- ⑳トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ㉑川遊びを始めよう! ~川の安全管理トレーニング~ は、
都合により中止
- 【早朝 WS】 ①生物多様性を映像で感じよう ~いっしょに生きる道~
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③ゼロからの火おこし術
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2010(通算 24回)

- テーマ: 「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時: 2010年11月13日(土)~15日(月)
- 参加人数: 177人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性条約第10回締約国会議の結果」
 - ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
 - ・提案「What is CEPA??」
 - ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
 - ・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ① 自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ② 日本の自然観から考える環境教育
- ③ 農的暮らしの学校
- ④ 自然感を耕す: 人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤ 生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥ 生物多様性条約の CEPA って何だ?
- ⑦ 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧ エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3

-
- ⑩「サステナビリティ」の基本はこれだ！ ※
 - ⑪これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識 ※
 - ⑫生物多様性を普及する環境教育を目指して
 - ⑬森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
 - ⑭大学生のための食育プログラム
 - ⑮命をいただく～ニワトリと生きる～
 - ⑯エコロジカル・シンキングゲーム
 - ⑰「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう！
 - ⑱イナカとこどもと日本の未来を考える
 - ⑲企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

- 【早朝 WS】
- ①ノードコールハイク
 - ②多様性を感じる観察会
 - ③ゼロからの火おこし術
 - ④朝飯前の手仕事
 - ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
 - ⑥生き方を学ぶ自然観察
 - ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
 - ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
 - ⑨みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

■環境教育プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い

■JEEF 理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、
公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

1 日目

開会式・全体会 1

開会式

司 会：(公社)日本環境教育フォーラム理事 西村 仁志
開会挨拶：(公社)日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

全体会 1 パネルディスカッション

「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

<コーディネーター>

広瀬 敏通氏 (NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表)

<パネリスト>

佐々木 豊志氏 (くりこま高原自然学校 代表)

島山 信氏 (NPO 法人森は海の恋人 副理事長)

森 撰氏 (雑誌オルタナ 編集長)

司会

(公社) 日本環境教育フォーラム理事 西村 仁志

これより日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2011 の開会式を始めます。司会をさせていただきます、公益社団法人日本環境教育フォーラム理事を務めております、西村仁志と申します。どうぞよろしくお願い致します。このミーティングは 1987 年にこの清里で、清里フォーラムとして始まりました。翌年からは、清里環境教育フォーラムと名前を変えて開催されるようになりました。1992 年に日本環境教育フォーラムが出来てからは、清里ミーティングと呼ばれるようになっていきます。1987 年の第 1 回目から、今年で 25 回目の記念すべき回ということになります。それでは、この会を始めるにあたりまして、主催者の公益社団法人日本環境教育フォーラムを代表致しまして、岡田康彦会長よりご挨拶を申し上げます。



開会挨拶

(公社) 日本環境教育フォーラム会長 岡田康彦



日本環境教育フォーラム会長の岡田です。今年も約半数の方が、初参加と伺っておりまして、初めての方もここでいろんな方と仲良くなってもらい、多くのことを吸収してもらえればと思っています。今年の場合にはですね、何といっても 3 月 11 日の東日本大震災で今日この後、そのテーマで全体会があると思いますが、私も実際現地に行き、色々な方の話を聞くにつけ、若い人のボランティア活動が物凄い大きな力を持っている。昨今、色々なことは言われているのですが、我が国の若い人たちも捨てたものじゃない、という評価が改めて流れたと思います。そのボランティア活動の中核を為して、旗振りを行なっている人達が我が日本環境教育フォーラムの有効メンバーに何人もいます。実際にそこで旗振りをして、現地で指揮を取っていただいている人達からお話が聞けると言うことで、今日はまた新しい勉強が出来るなど私も楽しみにしています。どうぞよろしくお願い致します。

現地開催事務局 挨拶

(財) キープ協会常務理事 林野 尚樹

ようこそ、私どもキープ協会にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。心から歓迎を致します。このミーティングは様々な方のご支援ご協力の上に成り立っております。5 つの企業から協賛を頂戴しております。それぞれの企業の方も今回参加者として、ご参加をいただいております。この場を借りてご紹介させていただきます。アサヒビール株式会社様、株式会社損害保険ジャパン様、J-POWER 電源開発株式会社様、NTT ジーピー・エコ株式会社様、日能研様、以上 5 社から協賛をいただいております。また、このミーティングの開催に当たりまして、環境省、文部科学省、国土交通省、経済産業省、林野庁、山梨県、日本環境教育学会からもご後援をいただいております。今回は、環境省から 6 名の方にお越しいただきました。

環境省のご関係の皆様、お名前だけご紹介させていただきます。自然ふれあい推進室の澤野崇様、環境教育推進室の渡辺裕信様、馬場友望様、自然環境局の番匠克二様、東北地方環境事務所の谷口哲郎様、那須自然保護官事務所の深澤譲二様、以上の皆様にご参加いただいております。期間中いろいろと直接コミュニケーションを取っていただければと思います。どうぞよろしくお願い致します。そして地元山梨県からも、山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターの会場使用などご協力をいただいております。ありがとうございます。

1 日目 全体会 1 パネルディスカッション

「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

<コーディネーター> 広瀬 敏通氏 (NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表)

<パネリスト> 佐々木 豊志氏 (くりこま高原自然学校 代表)

畠山 信氏 (NPO 法人森は海の恋人 副理事長)

森 摂氏 (雑誌オルタナ 編集長)

一広瀬 敏通氏 (NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表)

皆さんこんにちは。3月11日に起きた災害は、私たちのここにいる人たちが生きている間に遭遇した最も激甚な災害です。それだけに、世の中を変えるインパクトを持っているという風によくの方々が言っています。というわけで、これからパネラーとなる方々はそれぞれの方が何らかの形でこの震災に関わってきた方々に話をさせていただいて、環境教育がこの災害にどのような関わりを持つことができたのか、あるいはこの震災後の8カ月、どのような日々を私たちは送ってきたのかということ話を進めたいと思います。全体会では、みなさんも一方的に話を聞くだけではなく、様々な形で参加して頂きたいと思っています。申し遅れましたが、私、日本エコツーリズムセンターの広瀬敏通と申します。

災害というものについて、みなさん日頃考えないと思うんです。東京都内で行ったアンケート「あなたはもし、この首都直下型地震が今、もしくは明日起こるとわかったらあなたはどうしますか。」というアンケートを行いました。たいいていの人には逃げるだろうと思って聞いたのですが、「諦める」という回答が一番多かったのです。「諦める」という回答の背景に、具体的には諦めてはいないけど、どうすればいいかわからないという状況が今、私たちを取り囲んでいるのではないのかという風に感じました。今回の東日本大震災で、もし皆さんが幾日かの日々を過ごす体験、被災をしていれば「諦める」という回答がでない選択が生まれるだろうと思っています。そんなことを含め、みなさん自分の行動を振り返りながら、この全体会の議論をお聞きいただければと思います。

先に時間短縮のためにご紹介をしてしまいますが、パネラーとなります気仙沼の畠山信さんは、この清里ミーティングの仲間でもあります。命からがら助かったというお話しをしてくださいます。もう一人が、くりこま高原自然学校の佐々木豊志さんです。阪神淡路大震災のときに一緒に現地入りした仲間ですが、3年前は自分も被災したわけなのですけれども、今回もいち早く現地入りして、我々と組織作りをしてきてくれています。それから森摂さんはオルタナという会社を通して、現場ではないが様々な形で私たちをバックアップしながら、いろんなムーブメントを周りで起こしてくれた方です。皆さんそれぞれの立場からお話を伺いたいと思います。それでは最初にプレゼンテーションを始めていきたいと思いますが、最初にまず私のほうから話題提供をしていきたいと思

RQ (レスキュー) 市民災害救援センターを震災勃発直後に立ち上げて、今日まで来ています。この RQ 市民災害救援センターは、東京の西日暮里の日能研ビルにエコツーリズムセンターが間借りしております。そこを拠点に話し合いが行われ、結成されたという形です。今回の被災は青森県も一部含まれますが、大きくは岩手、宮城、福島です。私たちは最初福島に入ったのですが、そのときにはもう水蒸気爆発が起きていて、ここで長期のボランティア活動は厳しくなってしまう、最終的に宮城の北部に場所を移動してやってきました。現在宮城県北部に5ヶ所、それから岩手県の釜石と福島県のいわき市に我々の仲間がやっている拠点があって、全体で7ヶ所の拠点を運営しています。400tの物資を550ヶ所の避難場所に配るところから始まり、昨日現在で32,000人を超えるボランティアが現地で活動しています。私も昨日、宮城県の登米市から戻ってきました。

最初に「よし一緒にやろう」という風に手を組んだ自然学校が60団体くらいです。自然学校がこんなにもパツと動いたというのが非常に特徴的です。自然学校じゃないものも、例えば日本環境教育フォーラムや日本ネイチャーゲーム協会、日本エコツーリズムセンター、日本アウトドアネットワークなど、みんな自然学校の仲間が作っているネットワークです。それから自然学校の特色を少し簡単にご紹介すると、野外技術があるとよく言われています。それはあまりたいしたことではないのですが、特記すべきはやはりコミュニケーション能力が非常に高いということです。現地在りしている中で、人々の思いを形にするように繋ぎあわせていくという能力にとっても長けていると思います。それからチーム力があり、機動力がある。プログラムにして多くの方を招き入れることができる。そして全国的なネットワークを持ち、社会的な活動をするという目標を非常に強く持っている。こういったような特色を持っています。



RQはこれからどうなっていくかと言うと、11月末に一旦ボランティアによる運営を停止し、今後中長期に向けた專業に切り替えていく予定でいます。そのために現地で地域の復興拠点となるような自然学校を作っていく、ボランティアだけの組織から住民と協力する運営にしようと思っています。全国の市民、企業などを呼びこみ、自立運営を目指して収益活動を強めていこうと。復興と災害教育の支援をしていこうと。これは、欧米などではよく見られる形ですし、周辺諸国でも災害時に自然学校の形で支援が入ってきて、それに対処していこうという動きが行われています。日本でも是非これをやってみようと考えております。ちなみに災害教育では、訪問者らが被災地や被災者の窮状に触れて、その時に貢献という感情を非常に強く持つこと、自分でも貢献できることをしたい、なんとかしたいという感情を非常に強く持つこと、それが人格的資源となると思います。それは教育体系に位置づけるための形で位置づけて、11月末には一般社団法人 RQ 災害教育センターというものを作り、被災地の支援に長期的に乗り出そうという風に体制を取っています。現地では各ボランティア拠点が、名前は変わってきましたが、唐桑自然環境センターとか、河北リオグランデとか蜚の学び屋とか、歌津てんぐのヤマ学校とかですね、そして一般社団法人 RQ 災害教育センターがこれらを支援するというような構造で動いています。

この8か月、私個人で言うと環境教育というワードが頭に浮かんだ時ってなかったんです。自分が培われてきた行動基準で動いてきました。それは例えば、現場に立って考えろ、躊躇するということは後悔が多い、目の前の事実こそが雄弁であると、机上の情報が全てではない、自分ひとりだと思ふな、必ず共鳴者がいる、動けば渦が生まれる、行為は新たな状況を自分で作ることができる、そしていつも先を見る、先の世界は自分で作る。こんな行動基準を我々の仲間みんなほとんど例外なく持っていたと思います。災害は悲劇だし、惨憺たる状況を生み出し絶望を表現します。それも事実です。でも一方で災害は自然現象であり、災害によってとても豊かな肥沃な国土が生まれ、美しい四季や温泉、森や泉、風景が日本にもたらされ、日本を訪れる人はみな美しいと声を揃えます。

今回の災害では「絆」という言葉がとても多く使われました。あるいは、仲間とか友。災害教育はこれを目的にしているのではないけれども、災害から生まれる一つの大きなものですね。そして人の心と体を動かす力について見てみると、やはりポジティブウェーブ、前向きな心。私たちは、例えば今回の災害でたくさんの仲間たち、ボランティアの人たち、あるいはそれらを応援する人たちによって支えられながら、活動を現地、あるいは全国で行なってきました。それがもし、絶望感に裏打ちされてやったのだとしたら、とても持たないですよ。我々は常にポジティブに笑顔を絶やさずにボランティア活動をやっていました。その笑顔は、最初は不謹慎だと思われていたかもしれない。教育も災害救援もその辺が根っこにあるのではないかと思います。私からのプレゼンテーションはここまでにして、畠山信さんにバトンタッチをして、お話を伺いたいと思います。



一畠山 信氏 (NPO法人森は海の恋人 副理事長)

皆さんこんにちは。気仙沼から参りました。NPO 法人森は海の恋人の畠山信と申します。まず、この中にいらっしゃる方々の中でもおそらく多くの方々が、気仙沼にボランティア等で支援をしてくださったかと思しますので厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。今回の震災でいろんなものを失いまして、NPOにしても事務局ですとか、バックアップデータを置いていた私の自宅ですとか全部流されてしまっていて、「あーあ」みたいな感じにはなっていたのですけれども、広瀬さん、佐々木さん、そして支援団体の中に古くからの付き合いがある方がいらしゃった為、早くから励ましのことをいただきまして、なんとか今日に至っております。それで、なんだかインディージョーンズの話をしるということで、環境教育と無理やりくっつけて今日電車の中で作ってきた話なのですけれども、私、牡蠣、帆立の生産者もやっております。実はそちらが本業といいますか、そちらをやりながら本当の自然教育というか環境教育を伝えられたらと思って、NPO を立ち上げたのであります。生産者ですので、震災当日は海べりで漁師の作業をしておりました。地震がグラグラと「やばい、やばい」と言っているときにはもうすでに引き潮が始まっており、私は船を守るために船を沖へ出したんです。やたらエンジンの調子がいいなと思ったら引き潮に乗っていたんですね。もうすぐで沖に出るぞというところで第一波に遭遇してしまいました。船の舵がまったくきかなくなってしまっていて、すったもんだがあつて船を捨てて、なんとか泳いで陸地に着くことができ、今ここに立っています。震災当時は、生き残ったことが良かったのか悪かったのか、非常に悩ましいなあと思っていたのですけれども、どんどん時間を追うにつれて生きていて良かったのかなあと少しずつ思えるような出来事が多くなって参りました。「海と生きる」これが気仙沼の復興のキーワードになっています。「海と生きる」というのは非常にシンプルなのですが、海辺に生きる者にとっては非常に複雑で深い思いがこもっている単語といえると思います。

今までの主な活動は、環境教育がメインになっておりますけれども、環境問題に関しては生産者が一番リアルなところを知っているんですね。富栄養化なんていう言葉は漢字で書いてみればその意味がわかると思うのですが、それを実際に目の前で毎日経験しているのが生産者であります。和船で海に漕ぎ出して、いかだで牡蠣とか帆立の養殖をしている様子を体験してもらって、その生の牡蠣や帆立を食べてもらう。そしてその食べた牡蠣や帆立は一体何を食べて育っているんだろう、といった観点から考えていくと必ず山のほうに話が行くという環境教育プログラムをメインに動いておりました。それが3月11日に震災が起き、電信柱も全部倒れていて車が走れない状況だったのですが、5月ごろには道路がやっと開通し、私は車が動くようになってから、うちのプログラムに参加してくれた子供たちの安否がとても不安になって、とりあえず住所録もないので住所を覚えている子たちだけでも確認しようと、スタッフたちと一緒に各地へ行って、みんな生きて良かったなということをしておりました。この子供たちの中からどこか連れて行ってという言葉がとても多く出ました。さらに親御さんのほうからも、失業されている方が非常に多く、とにかく忙しいんですね。家の片づけや津波の片づけ、職場の片づけ、仕事探し。子供たちは本当に悲惨な状況に置かれていました。そこで、7月の夏休みにコスモ石油さんからの助成をいただき、道具を揃え、子供たちとキャンプを開催しました。やはり子供は大人に気を遣って生きているんですよ。ものすごく気を遣ってはっちゃけないんですね。なので、そういうフィールドを与えてやるだけで本当に心から笑顔を取り戻せる時間、機会が増えたのではないかなという気がします。このキャンプを経験して帰った子の親御さんからも「子供の元的笑顔を久々に見ました」なんていうありがたいお言葉をたくさんいただきまして、やはり、これはやって良かったんだなあと思いました。

9月に入り、もっと子供のプログラムを増やそうと思っていたら、地盤沈下が非常に問題になりまして、私の家の目の前が冠水して孤立する時間が非常に長くなってしまったんですね。車も通れない、歩いても渡れないくらい深くなって、それを逆に考えると地盤沈下によって湿地が形成されたということに気が付きました。かなり広い湿地が作られたんですね。昭和初期くらいの地形に戻ったと地域の長老たちは言うんですね。私の集落は高台への集団移動を希望していて、おそらくそれは実現されるであろう。では、家以外の部分をどうにかみんなで作っていけないだろうかということで、この湿地を絡めて、地域づくりをしていこう。これを「ボレロプロジェクト」という。なぜボレロなのか、私がボレロが好きだからです。湿地を生かした環境づくりをしたいと考え、研究機関と一緒に海の調査をしています。具体的には、海水、泥、生物の調査をしています。なぜかという私が生産者なので、自分が作ったものが食べ物になるかが本当に不安だったんです。故に4月～5月頃から色んなボランティアの研究者の方と一緒に、助成をいただきながらですが、継続的に調査をしております。その海の調査をもう少し陸域にまで広げたいということで、これからまた湿地メインの調査をしようかなと思っています。

それから、「子供の居場所づくり」、これは必ず必要だなと思います。校庭には仮設住宅がたくさん並んでいる。親は仕事探しに忙しい状況がまだまだ続いている。家は仮設住宅で狭く、ストレスが溜まる。そういった状況に置かれている子供たちには、遊ぶ場所、安心できる居場所が必要だなと私は思っています。また、地域の雇用づくりも私は考えております。たとえば地酒ですが、日本酒とかビールとかはあるのですが、ウォッカはなかなかないし、できれば毎日でオイスターバーが欲しいなと思っています。ウォッカ、オイスターを使うと「オイスターショット」という牡蠣料理ができるんです。非常においしいです。この「オイスターショット」が食べられるオイスターバーができたらいいなということで、いろいろ水面下で動いています。ここに地域の雇用が生まれるのではないかと考えております。集団移転における住居作りもできれば地元の材料を使い、現在大工さんの技術を伝える方々が非常に多くいますので、その方々と一緒に「自分たちの家は自分たちの手で作る」というプロジェクトを立ち上げようとしております。課題や問題は次から次へと出てきます。高齢化や防潮堤の建設なんていう話も出ています。被災地沿岸部をすべて対象にした大きい堤防を作る計画で、5年以内に作られるそうです。この堤防の問題もありますし、また一番大きいのは住民のコンセンサス。ボランティアシンドロームにかかっている方が結構いる。自己満足型の団体が結構いる。さまざまな複雑なニーズに応えられない。それと支援団体内部の問題として上層部と現場の認識の違いという大きな問題を抱えた団体が私から見るとたくさんあります。様々な問題もありますが、今後いろいろな方々と一緒に震災の復興という大きな枠ですけれども、頑張っていければなと思っています。長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。



一佐々木豊志氏（くりこま高原自然学校代表）

みなさんこんにちは。くりこま高原自然学校の佐々木です。宮城県の北部、今の畠山さんは沿岸部ですが、私は西の山の中で自然学校をやっています。今日は環境教育と災害でどんな環境教育としての役割を果たすかということで、今回の震災以後の動きを紹介していきたいと思います。

まず、環境教育は体験を通して学ぶということがベースにあると思います。私も体験から学ぶという野外教育や冒険教育をずっと専門でやってまいりました。ですから、体験からどう学んで、どう役立ってきたのかということ振り返ってみたいと思います。実は今日は自然学校代表で私の名前が出ていますが、日本の森バイオマスネットワーク、それから先ほど広瀬さんが言ったRQ市民災害救援センターの3つの顔で今回の震災は活動をしていたので話が混ざりますが、話を進めてまいります。

今回の東日本大震災では、本当に今までつながった人たち、阪神淡路大震災から中越沖地震や3年前の宮城・岩手地震で被災した方たちに助けられました。これは先ほどもご紹介したようにRQでも3月17日に動いていました。このときには私は被災地に入っているような情報を流していました。最初は物資支援、泥だし、片づけ作業、物資作業のほかに被災者がポツポツになってつらい思いをしているので交流の場の提供など。また、企業はこういうことができるのか、オルタナの森さんともお会いして進めていきました。こういった形で色々な活動をしていました。

現在、宮城県内は5か所RQの拠点があり、それで東北本部長をやれということで、ずっと活動してきました。最初は、体育館を使って全国の物資を集めて、たくさんのボランティアが来て毎日ミーティングを行いました。RQはひとりひとりがハブになって、まさに体験学習なんです。体験して振り返って何が問題かというこの繰り返しなんです。ボランティアさんは自分で課題を見つけて自らを律する。色々な人が集まってプライベートの空間もないボロボロの状態でも活動しました。それから知らない人とも協調して、他人を思いやる心っていうのは被災者の気持ちを思いやる、それから感動する。本当にやりつくして涙を流して帰るボランティアさんもたくさんいました。それから震災当時は気温がマイナスにまで体育館が冷え込んだんですけど、そこでも元気に活動するという健康や体力を持った人たちが集まりました。こういうシステムは昔からあったわけではないんです。毎日毎日が振り返りの連続で都合の悪いことは次はどうするかと話し合いながらずっと続けてきたんですね。たくさん人が亡くなった場所にも支援に入りました。南三陸の小学校は20メートルの高台にある校庭なのですが、ここも波をかぶっているんです。1階まで波がきました。細かいガラスの破片を取り除いたり、手作業でずっと不要物を取り除いたりという作業を行っていました。また、子供たちを元気にしようということでサッカー元日本代表監督の岡田さんと呼んでサッカー教室を開催しました。また、全国の自然学校の人たちが集まって元気子供村という、子供たちの面倒を見るプログラムをやりました。それから妹・弟を亡くした中学生がたくさんいて彼らは行き場がなかったので、ボランティアセンターを解放しました。あとバイオマスネットワークで何ができるかということですが、バイオマスネットワークは私が3年前に被災して山を下りた時に新しい事業で作った組織です。森林資源を使った雇用を作ろうということで、森林資源をエネルギーに変え、木質ペレットをつくる。そして木質ペレットを燃焼するストーブを普及させる。今回はバイオマスネットワークも全国から支持をいただいて、RQと並行して動きました。震災直後、電気が止まり、

流通・石油が止まり、被災地が寒さでガタガタ震えていたんです。2万人ほどの死亡者の中で92%が溺死でした。残りの8%は津波では助かったんですけど、寒さで亡くなってしまった人たちなんです。低体温症、いわゆる凍死をしてしまったのです。ですので、私たちは各避難所にペレットストーブを設置して回っていました。全部で43台設置しました。あとはWFPのテントも立てるのも受けました。それから、活動しながら組織力と人間力を見せられたのと、プライドの面が出てきて、バイオマスネットワークを利用するメンバーに製材所、工務店さんがいるので、プレハブではない地元の木を使った仮設住宅を建てましょうという活動をしました。ただ、法的に行政的にはこれは門前払いで色々な問題があつて出来なかったわけなんです。ただそれでは済まないのので、民間の力を借りて復興支援センターというものをつくりました。なんとかキレイな環境をつくりたいと思い今動いているところです。あと、テントで商店街の支持をしたり、産業を復興するという部分では色々な人の力をお借りしたいなど考えております。



一森 賢氏 (オルタナ編集長)

環境とCSRと「志」のビジネス情報誌をやっています。今日この場にお呼びいただき、このパネリストのメンバーを見て、びっくりしたんですね。畠山さん、広瀬さん、佐々木さん。なぜびっくりしたかということ、この3月11日の震災時に、私たちも動きました。そのときにオークヴィレッジという会社がございまして、その社長の稲本さんから気仙沼の畠山さんのお父さんの安否がわからないので見てきてくれないかと。といっても、電話も通じないだろうし、道もどうなっているかわからない。とりあえず唐桑半島に行き、たき火をしている役場の方に会ったんです。当然畠山重篤さんは有名な方なので、「お宅を知っていますか？」と聞いたら、「もちろん知っている」と言ってそこから2、3キロのところへ車で連れて行っていただきました。安否の確認をして、写真も撮って帰ってきました。こういう体験もあつて、まず畠山さんを知りました。それから私はビジネス情報誌をやっているのでも、企業の方のCSRビジネスと関わりがあるんですけども、そういう人たちを30人くらいバス1台で様子を見に、仙台、石巻、気仙沼、女川、大船渡をまわりましたが宿がないんですね。30人いっぱい泊めてく

パネルディスカッション

ろがないかと。そこでたまたまくりこま高原自然学校という名前を思い出したんですね。くりこま高原自然学校だったらなんとか30人くらい泊まれるんじゃないのかと思って電話をしたら、佐々木さんが出られて。このときは春先だったのでまだ自然学校は閉まっていたんですが、わざわざ開けていただきました。そういう経緯がありまして、本当に何よりも縁を感じるなとすごく思いました。

それでは、私どもがどういう雑誌かというのを簡単にご紹介します。オルタナという紙の雑誌を全国の書店で発売しています。またWEBでも配信しています。その中で、私たちはどういう価値観で動いているかといいますと、経済社会やビジネスにおいて21世紀の新しい価値観を探るといのが私たちの使命です。キーワードとしてはgreedからgreenへ。資本主義から自然資本主義へ。そして灰色の国から緑の国へ。家から煙突が出ていて、原子力発電があり、これらを緑にしていこうというものです。方向性は皆様一致しているかと思いますが、これを進めていくのが私たちオルタナの役割であるということです。とにかく皆様の意識を変えていきたいと考えております。

このフォーラムに参加するにあたって、私たちができることというのをまとめてまいりました。1番目は、環境教育と企業との橋渡し。私たちは企業のCSR部門とCSR部員塾というのをやっております。これは主に大企業とですね。中小企業とはグリーン経営者フォーラム、全国に70社ほどあります。そして2番目としては、ソーシャルメディアとしての情報発信。今流行りのツイッター、フェイスブック、メールマガジンなどを駆使して飛び道具として発信しています。私たちは社員数がたった7人の小さな会社なのですが、これらのツールを使って、10年前だったらこういう小さなメディアが影響力を持てるということはありませんでした。インターネットがなかったらこの雑誌はできなかったと思っています。そして3番目として、知識と知見の融合です。オルタナ独自のネットワークをつくっていききたい。ジャーナリズムとアカデミズム、企業市民。こういうネットワークをつくっていききたいと思っていますので、今回のフォーラムに参加するにあたって、私たちが最大限の支援をさせていただこうと思っていますし、みなさんのお役に立てていきたいと思っています。

最後に一つだけ、提案をさせていただきます。「あなたも記事を書こう」ということです。記事を書くということは一見難しそうですが、とにかく情報発信をしていかなければいけない。なかなか大きなメディアが取材に来てくれないとか、私たちは取材に行きたいと思っているのですけれども、なかなか人が足りない、資源がない。そこで、みなさんもしよろしければ記事を書いてみませんか？そしてみなさんの活動をオルタナやうちで提供しているヤフーのニュースで出してほしいんです。お金を支援するのは難しいのですが、その分書き方を教えていきたいと思っていますし、こういった輪が広まれば、みなさんの活動も広まっていくという風に考えております。ご清聴ありがとうございました。

Q1「日本の復興とはどういうことか？」

佐々木：「国内の資源を活かす」

日本は資源が少ない国だと学校で習ってきたと思うんですね。それは、すごく錯覚を起こしてきたもので、今回は震災で電気が止まり、油の流通が止まり寒さに震えていたと。私は3年前に地域の資源を活かすということで森のエネルギー資源を使おうと思いました。かつては森からエネルギーを取ってきたと思うのですが、ここ半世紀でパタッとなくなったので、もう一度森林資源だけではなく、人も含めた国の中の資源、足元の資源を役立てて復興をすることで、持続できる社会になるのかなという気がします。

広瀬：資源がないと言われてきた日本ですが、振り返るとエネルギーとか鉱物は少ないけれど、別の資源はとても豊かではないかということですね。

畠山：「人の心持ち」

どんなに良い自然を保護しようと、保全しようと、どんなにいいものを作ろうと、結局はそこに住む人の心持ち次第でどうにもなってしまうっていうのを今回の震災で身をもって知りました。やはり、人の心持ちの底上げとか人づくりではないでしょうか。

広瀬：自分の住んでいる集落から生き残った人たちがバラバラに様々な避難所に逃げ込み、または保護されて、そこでは今までのコミュニティと全然違う人たちと一緒に暮らしている。そこで新しくコミュニティが出来上がってきたんだけど、今度は仮設住宅に抽選でバラバラに入っていくことになり、自分が住んでいた地区とも避難所で知り合った人もまた切り離されて個々になってしまった、そういう状況で、人と人の繋がり合いとか、心持ちが人を助ける大きな力であることを反面教師のように知らされた出来事でありました。

森：「be green」

今回の震災で大変多くのインフラが破壊されたわけです。でもこれからは今までと同じインフラ、同じ町を作っても意味がないと思う。やはり「サステナブル＝グリーンな未来」を描きながら地域を再生していくのが大事であって、今までのコンクリートと鉄でできた構造物、あるいはダムといったものから脱却をし、エネルギーも原発や化石燃料に頼っている社会でいいのかと改めて考え直さなければならない。変化の機会になるんじゃないかと思えます。

広瀬：森がなく煙が充満している写真を見て、子どもの頃はこういう環境であったことを思い出しました。日本人はあちこちに

みを捨ててという状況だったものも、気が付けばごみが減って森も増えてきていて。こういったものは一人一人の暮らし方で変わっていくものなんですよね。

Q2 「あなたの環境教育はどのように表現してきたか？」

森：「伝える（プロもアマも）」

インターネットの出現でプロフェッショナルの境界線がだいぶぼやけてきた。もちろん悪い面もあるのですが、良い面もたくさん出てきたんですね。例えば昔は、私は新聞記者出身なのですが、後輩には新聞は毎日絶対読めと言ってきたのですが、最近はあんまり言わなくなった。それはなぜかという、ツイッターやフェイスブックで情報が取れる方法も結構あるし、教育という部分からいうとプロというのは先生じゃなくても伝えられる。あるいは、プロじゃなくても記者じゃなくても伝えていくことができる。これは21世紀がそういう時代になるんじゃないかという期待と予感を込めて書きました。ネットと言うと嫌がる人もいたり、迷う人もいたりすると思うんですけど、いい部分もたくさんあるし、そこを伸ばしていければいいと思います。

畠山：「リアル」

私は牡蠣、帆立の生産者をやっている、人相手ではなく、自然相手が主な仕事になりますので、世の中の理想と現実のギャップというものを毎日目の当たりにしながら、仕事をしているわけです。世の中にあふれている情報、あるいは指導する側の立場の方がリアルな現実を知らずに子どもたちに指導して、情報を流している方が多いような気持ちがあつとあるんです。私の役割は虚偽りのない現実を受け入れられる器を作ることかなと思っています。それが環境教育の柱というかそういうところに繋がるんじゃないかと思っています。私も最近フェイスブックを始めて、ボタンがいっぱいあるのでさっぱりわかりませんが。

広瀬：場を提供するとか、体験を提供するとか、情報を提供するとかいろんな意味合いのリアルがあると思います。今、畠山さんはリアルな状況の中で生還して、そしてリアリティを体現してやっているという状況から来ているんですかね。

佐々木：「グローバル経済に翻弄されない生き方」

環境問題はやっぱりグローバル経済が引き起こしているなと根本的には思っています。バブルの時に東京に住んでいて、サラリーマンをやっているバブルでお金にまみれて、それがちょっと変だな、いやだな、違うぞというふうに15年前、全く違う方向の自然学校を山でやり始めました。グローバル経済に翻弄されないということで、地球という部分に軸をおいて農的な暮らしを表現し、実践していくということでとらえてきた。それはある部分間違いではなかったけれども、今回の震災で復興に向かうということで、グローバル経済というのは役割があるんだなと。あるいは今回企業の方にもたくさん会いましたので、そういった部分でグローバル経済に翻弄はされないけれども、しっかりと経済の役割を担って作る必要があるなと思います。翻弄されないのは間違いな

と思います。

Q3 「環境教育は日本の社会にどう貢献するのか？」

畠山：「バランスがとれた人、(社会)」

やはり人づくりだと私は思うので、いろんなバランスがあると思うんですが、偏らないということが私の中のベースにあって、支援の活動の中でもそうですけども、1団体に偏らないとか、大きいところに偏らない、バランスを取りながら、漁師なので船のバランスを取らなければならない。なので、そこに貢献できるのではないかなと思いました。

佐々木：「持続可能な社会、平和で豊かな暮らしを作ることができる“人づくり”」

書く言葉が私のNPOのミッションになってしまいました。最終的には人づくりです。どういった人づくりかという持続可能な、とか平和で豊かな、とかあるけれど創ることができる、創造することができる人づくりではないかなと思います。創造するとは、結果が保障されない、先が見えないことでも一歩踏み込める、踏み出せる人たちだと思います。今回の震災の時もボランティアさんが集まって広瀬さんも先を読んで行動していたわけではなくて、その瞬間、瞬間に動いていける人だと思います。

森：「長期的視野 seven generations」

一般的に皆さん働いている人は明日のこと、来週のこと、あるいは来月のことを見ながらずっと走り続けている。短期的な視野だけでやってしまうという例も少なくないと思うんですけども、環境教育の良いところというのは、30年、50年、100年くらいの視野を教えてくれる。地球の年齢である46億年という時間軸も教えてくれているわけですから、長いスパンの視野というのがとても大事だと思います。「seven generations」一集団として意思決定するときには、7世代先の子孫のことを必ず考えて決定するという有名な考え方があつたわけです。7世代ということは200年ということです。今回不幸な原発事故が起きて、セシウムの半減期を30年、またはそれ以上であつたり。こういった面からも長期的視野を入れる必要がある。できれば長期的視野に入れたくない項目でしたが、子ども、孫、ひ孫のことまで考えて社会を作っていきたいなと思っています。

Q4 「災害は環境教育 (EE) を育てるのか？」

馬場友望氏 (環境省)：端的に申し上げて、育てると思っております。いろんな方のお話をお伺いしておりますけれども、災害現場が与える影響というのは本当に机上では計り知れないことです。普通の自然体験と比べても全然違うものだとお伺いしておりますので、やはり災害は環境教育を育てるのかというところであると感じております。



広瀬：環境省はもちろん環境教育の所管の役所であると思うのですが、今回の災害で原子力の問題について、その後始末もやらなければいけない役職になったのですね。それからさらに、廃棄物の処理も環境省になったものですから、そっちの片づけ・除染といったことにてんやわんやになったわけなんですけれども、実はそこにも環境教育の芽がたくさんあるのではないかなと感じております。そういうのも是非役所として取り組んでほしいなと思います。

佐々木：「考えるきっかけ、チャンス」

教育になるかは別として、考えるきっかけやチャンスになるかなと思います。というのも、普段の暮らしが壊れて避難生活をしたりすると、普段考えていない部分が見えてきたり、欲張りになってきたりする。今回もエネルギーのことを考え始めた人もたくさんいると思いますし、何気ないトイレのことも循環することを考えるきっかけになると思うんですね。だからきっかけかなと思いました。

畠山：「きっかけ」にはなる

佐々木さんとまったく同じ意見なのです。人とのコミュニケーションといいますが、自分を見直す面でも非常に勉強になりました。そういった面で今回の震災は役に立ったというか、勉強になりました。津波が嫌だとか憎むとかいう気持ちはないです。津波でいろいろなくなりましたが、そういった気持ちは決して生まれなかった。そういうのはベースにあるものがあるからなのかなと私は思います。

広瀬：被災地の方から畠山さんと同じ意見を何度も聞きました。皆さん、肉親を亡くされたり家をなくしたりしているのに、どうしてなんですか？

畠山：津波は来るものであって、自然現象なんです。大きさの差異はありますが、それが沿岸部に住む、住まないの問題にもなりますが、本当に津波は来るものという認識だからです。

森：「Yes/No」

基本的には Yes ですが、編集長なのでできるだけ通り一遍の答えはしないと決めております。「Yes/No」にしました。なぜかという、逆に災害が来ないと環境教育ができないかというところというわけではないので。特に今回私が気にしているのは西日本の

人たちです。やはり東日本とはどうしても温度差があって、例えば私たちは雨が降っているからやばいなって思いますが、西に行くとそんなことは思っていないんです。まず、西日本に今回の3.11の教訓やライフスタイル、ビジネス、社会の在り方を変えなきゃいけないっていうのを伝えなくちゃならないし、方向性を伝えるのがやはり大事だと考えています。

広瀬：最近よく言われている言葉で「茹でガエル」という言葉がありますが、一見安泰な環境の中にいると自分のまわりの環境がどんどん悪化あるいは変化していることに対して、非常に鈍感になってしまいます。ところが、今回の災害のように劇的に自分の環境が変化するとやはり、様々な事を気が付かせてくれることもある。ただ気が付いたことはいいけれど、取り返しのつかないことになってしまったのも、実は今回の災害なんですね。最近は福島にも頻繁に行っているのですが、降り始めの雨は皆さんとても怖がります。それから雨どいの下、側溝に水が流れ込むところは、わずか1mの差で5倍6倍の数値が出ます。

広瀬：最後に、言い足りなかったことを一言でお願いします。

森：「eco も。social も。ethical も。」

エコロジカルだけじゃもったいない、という語弊がありますかね。格差問題とか、貧困の問題、海外の教育の問題とかあると思います。特に最近の日本は内向きになってきていると言われるわけですが、外の動きも環境問題だけじゃなくて、ソーシャル、それからエシカル（倫理的）としてよく使われているキーワードですけれども。これもフェアトレードとか、特に途上国の経済社会問題を考えるなど、どんどん横に広げていって欲しい。絞り込むのも大事なのですが、それと同時に横の方に広がっていくとさらに面白い。ここにいらっしゃっている方々は既にそうなっている方がほとんどだと思うんですけども。そういったことも考えてみました。以上です。

佐々木：「繋がった分、広がります。」

20年前このフォーラムに初めて参加しました。そのときはまだ東京にいて、自然学校もやっていなかった。このフォーラムに参加して、自然学校をやらなきゃダメだと思いきりこまに行きました。その栗駒という場所で自分の具現化するものを、毎年ここにきていろんな人たちに情報をもって、絞り込んでやってきて、12、3年経ってくりこま式のスタイルが生まれました。事業体としては、ほぼ形になったかなと思った矢先に、3年前の地震で被災しました。そこでいろんな人と繋がりが直して、立て直してやり始めて、また今回いろんな形で繋がりが広がりました。自分の場所でもなんとか形にしようと思ったんですが、今は繋がった分、広げようと思っています。それで、宮城県内にいくつか事業を起す、今までのノウハウを活かす雇用を考えております。いろんな人の協力を得たいので、雇用ではないですが、一緒に働ける人と繋がっていきたいと考えております。ただ、私が3年前に被災したときの建物がまだ直っていないんです。だから、私はまだ被災しているんだなと考えつつも、広げていこうと腹を括っています。

畠山：「来てね」

「気仙沼に来てね」というメッセージです。今回の震災でいろんなボランティアの方を見ました。遊びに来ている方もいます、写真を撮っている方もいます、本気で支援したいという方も本当にいろんなタイプの方と接しました。マイクロバスでわーっときて、写真を撮って帰るボランティアの方々もいました。それを見て、なんなんだろうなという気持ちがずっとあって、ボランティアはもう勘弁してもらいたいなという時期がしばらく続いたんですけど、ここ1、2か月で今の気仙沼の状況を見てもらったほうがいいんじゃないのかなという気持ちになってきたので、「気仙沼に来てね」という話です。

広瀬：これも、現地でよく聞く言葉ですね。物事の見られ方は、時期によってやはり違う。今、被災地ではたくさん来たボランティアの人たちがそのまま被災地の声を理解し、理解者として全国で声を上げてほしいし、そして人を連れてきてほしい。

連れてくることによって繋がりが生まれる。環境教育というのはまさに繋がる科学なので、繋がるということを通して我々は何を世の中に作っていくのかというのをこの2時間議論してきたと思うんですけども、環境教育しているって言葉を使う人は滅多にいないと思うのですが、エコツアーをやっているとか、農家民宿をやっているとか、自然学校をやっているとか、具体的な形でたくさんの人達は表現しています。我々がやってきているのは、真ん中の繋がりを作る、繋がりを使って仕事をする、そういうことをやってきているわけで、ここからいろんな繋がりを行動に移していけるといいなと思います。

ありがとうございました。



2 日目

3.5 時間ワークショップ

【午前の部】

1. 自然体験型環境教育入門講座 ※
2. 企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
3. 質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
4. 農的暮らしの自然学校
5. 森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
6. 里山応援ネットワークを作ろう！ワークショップ
7. 0 から仕事をつくる～体験からチームを作る～
8. 『ワールドカフェ～自分発！未来をかえる価値観考～』
9. 修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～

【午後の部】

10. 災害救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
11. ESD×CSR:サステナビリティ教育指針を体感！ ※
12. やったらできた！エネルギー系企業と弱小 NPO のコラボ
13. 環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
14. 自然感を耕す 自分と里地里山里水が元気になるワーク
15. 生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
16. PLT, WILD, WET の日本での可能性を考えよう
17. 原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
18. 狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～

※の印は、主催者企画ワークショップ

自然体験型環境教育入門講座

実施者:川嶋 直(財団法人キープ協会)

【概要】

1. 緊張を解きお互いを知りあう時間
 2. 森の中での自然体験の時間
 3. KP法(紙芝居プレゼンテーション)での講義の時間
- 講師である川嶋氏からの自己紹介があった後、参加者 20 名でアイスブレイクを行い、森の中へと移動した。

【緊張を解きお互いを知りあう時間】

「デートゲーム」を行った。参加者同士で月～金曜日それぞれのデートのアポイントをとり、順番にデートをしていきながら互いの関係を築いていく。デートでは、A4の紙を4つにわけて書いたメモをもとに約3分ずつ会話をしていく。メモの内容は①自分表すキーワードいくつでも②自分が目を閉じたときに思い浮かぶ景色③このワークショップに参加したねらい④今の気分を一言でであった。緊張していたら耳がふさがってしまう、不安を取り除くためにアイスブレイクを実施した。

【森の中での自然体験】

今回は「よく見ること・視点を変えること」をテーマに森の中での様々な自然体験アクティビティを体験した。実際に行ったアクティビティは、①スキヤキハイク、②森の万華鏡、③目玉うち、④もりんちゅの大冒険、⑤一筆入魂の5つで、いずれも「よく見る・視点を変える」きっかけをあたえてくれるアクティビティであった。以下に、それぞれを紹介していく。

① スキヤキハイク

このアクティビティは、イギリスの研修施設で「ミラーハイク」と呼ばれ行われていたアクティビティを日本版にアレンジしたものである。アクティビティの名は、坂本九のヒット曲「上をむいて歩こう」の英名タイトルから名付けられた「スキヤキハイク」。小さな鏡一枚を一人一人持ち、小さな鏡を空に向け、鼻をつけて鏡をのぞきこみ、鏡の角度を変えながら歩く。下を向いているのに、地面の上に白樺と青空がきれいとうつりこみ、空にぶら下がったような感覚になるなど、不思議で新鮮な世界に出会うことができた。

② 森の万華鏡

二人組になり小さな鏡をガムテープで合わせて、森の万華鏡づくりを体験した。このアクティビティは、北京郊外の柳と松しかない場所でも行え、自然の厳しい場所でもできるアクティビティである。参加者は森で拾った材料を組み合わせ、二枚の鏡の間に材料を配置していきながら、そして、2枚の鏡の開く角度を90度、100度、120度…と様々な角度で作品を見ていきながら、森の万華鏡を作っていった。花のような作品、顔のような作品など、ちょっと角度を変えただけで変化する様子を参加者は楽しんでいった。

③ 目玉うち

森の中にある自然物に目玉のシールを貼り、「森の友だち」をみつけた。「視点を変える」アクティビティである。よく観察することで、普段は気付かない自然の表情をみつけていた。

④ もりんちゅの大冒険

海人(うみんちゅ)の森バージョンとして、モールドで作られた「もりんちゅ(森人)」を登場人物に、二人組で森の一部を舞台にし物語を作った。火曜サスペンスのような物語やCMからきた物語など個性的な作品が10作品できた。

⑤ 一筆入魂

「よく見ること・視点を変えること」を重視しながら行った森の中でのアクティビティを振り返り、感じたことを一つの漢字に表現した。参加者の発表した漢字をいくつか紹介する。「泉」:視点を変えると泉のようにアイデアが浮かんできた。「驚」:環境教育はかたいものだと思っていたが、感じ方が変わった、楽しかった。「繫、繁」:みんなと思いをつなげることができた。既存の漢字のほかにも、「心、中、入」を組み合わせた漢字を作り、視点を変えることで、自然に対する思いを込めることにつながった、と感じたことを発表してくれた参加者もいた。

【KP(紙芝居プレゼンテーション)法による講義】

森から帰ってきた後、KP(紙芝居プレゼンテーション)法でペンボく様々なことがレクチャーされた。以下が、レクチャーされたことのポイントである。

- (中国の古いことわざから…) 伝える側の立場で。「言ったこと」は忘れられる、「見せたこと」は思い出しもらえる、「やらせたこと」はわかってもらえる、「発見してもらったこと」は(その人に)身につく。言っただけじゃ伝わらない。「言ったら伝わる」は伝える側の傲慢である。伝える側は伝えるためのあらゆる工夫が必要だ。
- 教育とは教え込むことではなく引き出すことだ。個人の主体性を養いたい環境教育だからこそ引き出す教育が大切だ。
- 環境教育の入り口には「自然を知る」、「問題を知る」、「解決方法を知る」の3つがあるが知ればそれで良いというわけではない。そこから行動する人を育てることが大切なのである。
- 環境教育において、自然を身体で感じ体験する機会・たくさんの方にしみる体験が必要である。

企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2

実施者:林田 悦弘・小堀 武信(公益社団法人日本環境教育フォーラム)

【はじめに】

最初にコスモ石油エコカード基金 CSR 環境室長の三浦幸雄氏より「コスモ石油エコカード基金」の取組みについて解説をいただいた。

【話題提供①】

三者協働の事例として「学校の環境教育支援プロジェクト」(コスモ石油エコカード基金) 全国 10 校の取組みについて事例紹介を行い、最初の話題提供を行った。

【グループディスカッション①】

参加者を「プログラム企画ディレクター(企業人含)」「教員・学生」「プログラム実施者・インタープリター」の3グループに分け、「環境教育に取り組む上での悩みは何だろうか」について話し合った。

①「プログラム企画ディレクター」

- ・大人へ対しての環境教育のツールが無い。
- ・学校の校長と現場の教員のギャップが大きい。
- ・どうすれば学校に信頼される組織体制になれるかよく判らない。
- ・企業は環境教育へ対して、複数年継続して資金を集めることが難しい。

②「教員・学生」

- ・学校でプログラムを実施したいのに、信頼をしてもらうのが難しい。
- ・信頼できる NPO かどうか、その判断が難しい(相互理解が必要)。
- ・決まった年間スケジュールの中で、新しい活動を取り入れていくのが難しい。
- ・学習指導要領が改訂されているので、企業・NPO は事前に理解して欲しい。そして教員とコミュニケーションをしてほしい。
- ・パートナーシップではなくコラボレーションを目指して欲しい。
- ・環境教育だけで生計を立てていくのが難しいと思う。
- ・環境教育などを含めた〇〇教育は全部で 23 個もあり、環境教育だけを取り上げるのが難しい。しかし外部からのサポートは望んでいるので、もっとマッチングの機会が欲しい。

③「プログラム実施者・インタープリター」

- ・年齢に応じたプログラムの実施が課題。
- ・環境教育という言葉をストックに前面に出すのか、食育や農業体験などの中に入れてしまっ提案をした方がいいのか、よく判らない。
- ・何が効果的なプログラムか、情報が集められない。昨年度の WS をまとめたレポート、事務局が全国各校で行ったインタビューをまとめたレポートを配布し、昨年度 WS との比較、学校からの要望について参加者と共有した。

【話題提供②】

林田悦弘(JEEF 事務局長)から、企業で働いていた経験から感じる協働の難しさについて、話題提供を行った。

・企業に勤めていると、「環境教育に取り組む団体」と言えば、JEEF も他の団体も区別がつかないため、誰でも知っている団体へ寄付をすることが多くなります。

・環境教育は長期的には効果があると判っていても、短期での費用効果の測定が大変難しい面があります。そして企業は NPO をボランティアとして考える傾向が強いですし、助成金ではコーディネーター型の NPO は、事務局人件費の管理が難しいのが現状です。

【話題提供③】

WS に参加していた都内の小学校の副校長先生より、学校で協働に取り組む際のポイントについて、話題提供をしていただいた。

- ・企業や環境 NPO から学校へ教材を送る際は、教員がカスタマイズしやすいものが望ましいでしょう。
- ・翌年度の計画は、年間計画を作り始める 11 月中旬頃から、学校と一緒に企画を作っていくのが望ましい姿だと考えられます。
- ・学校は知り合いから紹介された場合や実績がきちんとしていることが半れば安心して企業や NPO と協働することができます。

【グループディスカッション②】

次に「どうすればよりよい協働ができるだろうか」について、各グループに話し合ってもらった。

①「プログラム企画ディレクター」

- ・地域を絡めて、役割を明確にすることが必要だ
- ・課題をしてはコーディネーターにお金が落ちないことだ(コーディネーター職が成り立つように、資金を回すことの必要性)。

②「教員・学生」

- ・振り返りは子ども達だけではなく、教員も取り組むことが必要ではないだろうか。
- ・助成金は複数年で継続できる仕組みが欲しい。
- ・授業の中にいかに環境教育を取り入れていくか。難しいが重要だ。
- ・年度計画はちょうど今頃(11月頃)から始まる。そのため年度明けに助成金等の決定があれば、授業計画に穴が生じることがある。

③「プログラム実施者・インタープリター」

- ・綿密なコミュニケーションが必要だ。学生・学校のニーズを把握し、よりよいプログラムを構築し、担任が専任してもプログラムが実施できる体制が必要だ。そして企業×NPO×学校が忌憚らない意見を交換することが大切だ。
- 最後にまとめの時間を設け WS を終了した。

質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ

実施者:中西 紹一(立教大学ESD研究センター)



【ワークショップの目的】

「質的データ分析 (Qualitative Data Analysis=QDA)」の目的、方法、ソフトウェアの使い方を学ぶとともに、グループワークでの実践を通して理解を深め、参加者が今後の研究に役立てられるようにする。

【質的データ分析の目的】

インタビューやワークショップなどを通して得た数値で表せないデータ (=口頭データ) を科学的に分析することで、仮説の生成、研究対象の理論化、複数の概念を抽出する。発言の一つ一つを切り離して要素を捉えることにより、新たな気づきや核心を得ることができる。

【質的データ分析の方法】

・オープン・コーディング・・・文字におこしたインタビュー、ワークショップのデータを元に、一文ごとに小見出しづけをする。一言のキーワードでまとめるのではなく省略された主語や目的語を加えて文章で脱文脈化する。

例) わたしは、デザインの観点を、コミュニケーションという観点から評価していこうと考えています。

→コミュニケーションという観点からデザインを評価すべき

・焦点的コーディング・・・ばらばらになった文を共通する内容のものでグループ化し、見出しづけをする。

・概念カテゴリー・・・グループになったものをさらに共通する内容でカテゴリー化する。

上記の3つの段階を経ると、具体的で数値に置き換えられないデータがツリー状に抽象的・概念的に縮約される。

【質的データ分析の利点】

量的データ分析は事前に立てた仮説を検証するために行うが、質的データ分析は仮説がない状態から仮説をつくることができる。質的データ分析はデータを基本としているため、原資料とグループ化したもの、カテゴリー化したものを何度も行き来し、修正しながら仮説を練ることができる。また、量的研究では黙殺されてしまう少数意見にも注目することができる。

【実践してみてもの参加者の反応】

質的データ分析の説明を受けた後、過去に行われたワークショップの原資料を使って参加者 15 名が3 グループに分かれて質的データ分析を実践した。オープン・コーディングについて、「要点を見つけるのが国語の授業のようだった」、「発言者の方向性をずらしてしまわないか不安になった」、「発言者が何を言いたかったのか文字だけでは見えてこない」、「地道で長い作業」といったコメントが参加者から出された。

もともと現場にいなかったのだから、すべては伝わってこないのは当然であり、分析者は最低限、フィールドで臨場感を味わうことが大切である。コーディングに正解はないが、発言者の意図から大きくそれてしまわないためにはチームで分析するとよい。グループ化、カテゴリー化するワークの後には、「自分の過去のワークショップのデータでも試してみたい」、「ワークショップ参加者の背景も知らないと、概念化は難しい」といったことが挙げられた。

【ソフトウェアの紹介】

最後は N-Vivo という質的データ分析を効率的に行えるソフトウェアを紹介した。このソフトウェアを使うと、どのようにして仮説もしくは概念が抽出されたかを視覚的に見せること、また、各段階の文章を行き来することが簡単にできるため結果を説明するときに説得力が増す。

【全体を通して】

“GTA (Grounded Theory Approach) と KJ 法を足して2で割った感じ”の質的データ分析は、発言者の一言一言とじっくり向き合う分析法であり、一部の目立った発言をクローズアップするのではなく、全体を捉えることで発言者の真の考えに近づき得る。発言者の頭の中で明確にはまとまっていない漠然とした想いも、無意識に何度も出てくるキーワードを拾い上げることで整理することができるのではないか。

実施者: 加藤 大吾(NPO 法人都留環境フォーラム)、
高田 研(都留文科大学教授)代理 中澤 朋代(松本大学専任講師)、
塚原 俊也(NPO 法人くりこま高原自然学校)、梅崎 靖志(風と土の自然学校)

【概要】

田んぼ、畑、建築、料理、猟銃、家畜など、暮らしをテーマにする。プログラムは日常生活に近いところを題材としているところからその効果を日常へ持ち帰りやすいという点が農的暮らしの学校の優位点である。暮らしをプログラムとして捉えて運営している自然学校や個人の実例を紹介することで、その魅力を伝える。また、プログラム内容、経済性など、様々な視点から現時点での優位性と課題を見つけ、永続的に取り組める可能性を探った。

【当日の内容】

■アイスブレイク

加藤大吾をコーディネーターとして、3人1組に分かれて自己紹介、講座にもとめること等話し合う。その後の進行は、下記の流れを軸に各講師が交代で行った。

①事例紹介

②質問

③ぜひ、やってみよう

④参加者の意見を聞く

⑤今後の展望、理想

■塚原俊也 (NPO 法人くりこま高原自然学校)

①くりこま高原自然学校

・栗駒では、環境実験材として農的な暮らしを創ることをテーマとしている

・収入源は子どもキャンプ(最初は夏キャンプ、スキー、山菜採り、野外体験がメイン)

・松倉では、家畜としてのヤギ、馬、にわとりがおり、米を自給している

・米は年に50袋収穫があり、参加者の食事を賄うことができ、間接収入となっている

・山村留学や不登校児の自立支援等をおこなっている(受け入れ金額は3500円/日)

・自然学校のテーマは冒険教育で、ケの世界(生活体験)とハレの世界(自然体験)のギャップから需要があると考え

②質問

・今後のビジョンは?

家畜を増やして、加工製品を売り、一定の収入を得ること。そして地域に働く場をつくり、自立支援のニートの子たちを受け入れ、定住できるようにしたい。

・子どもの輝く瞬間は?気づきの瞬間。自分次第でなんでも楽しくなり、発想は変えられると子どもたちが気がついた瞬間が一番輝いている。例えば、寒い中で薪割りをする。最初おどろくが、やってみて、自分で自分の身体を温められることに気づき、進んでやれようになる。そんな時の変化がすばらしいと思う。

■梅崎靖志 (風と土の自然学校)

①あづみのパーマカルチャー

・農的暮らし(家を建てる)と農業(生業)がテーマ

・パーマカルチャーとは、自分の住んでいるところを暮らしやすくつくりかえること

・移住するための家を手に入れるには、自分で家を建てる、人の縁で家を見つける、知り合いや空き家不動産を自分で見つけて交渉する

・知らない地域に入り込むと、地域の人から不思議がられるため、話題となり必然性の高いつながりをつくる

・労働交換や物々交換をすることがポイント

・自然とつながる暮らしの魅力は、安心安全で健康であること。つながり合い、かかわり合い、教え合い、わけ合い。

■加藤大吾 (NPO 法人都留環境フォーラム)

①自分で家を建てる!

・廃材を最大限に生かし、20万円で家を建てた

・生態系の余剰分を収穫する。基本的に畑は積極的に手をかけないで自然の恵みを収穫。麦や大豆、特に在来種は育てやすい

・農業を始める際は、補助金等を積極的に活用することがポイント。新規就農等役所には様々な補助金があるので、足をこまめに運ぶ

・地域と根付くためのヒント

運動会、婦人会、行政審議会、パブコメ、役所に足を運ぶ、夜の誘いは断らない等

②質問

・獣害、鳥害対策は?

野生生物との優越をきちんと示し、人間のテリトリーをきちんと主張することが大事。

■中澤朋代氏 (松本大学専任講師)

①日本における農的生活学校の実態調査

・農的暮らしをしている人を対象に実態調査を行った

・「日本における農的生活学校の実態調査 中間レポート」参照

【まとめ(自分の描く農的暮らしとは?)】

4人グループでフィードバックを行った。「ぜひやってみよう!」「環境に負荷のかからない暮らしを全国に広めたい」「自分の子どもにもやってほしい」「女性にはすこし厳しいのでは…」等様々な意見がでた。参加者はどうやってはじめてらよいかということはまだ少し疑問に思っていたが、一般に広めることの重要性を改めて認識し、農的暮らしを魅力的に感じている人が大部分であった。

森林療法にできること～森林セルフケアの可能性

実施者：飯田 みゆき(NPO法人日本森林療法協会)

本杉 美記野(財団法人キープ協会)



【概要】

森林療法にセルフケアの概念をとり入れることで、自然の中で癒されるという経験をこれからの日本の復興に生かす可能性を探った。

【内容】

- ・実施者からのプレゼンテーション
- ・森林療法的なアクティビティ体験
- ・ワールドカフェによる対話

【実施者からのプレゼンテーション】

現在の西洋医学中心の医療は生活習慣病や精神的ストレスへの対処に限りがあり、予防医学や代替療法の必要性が認識されつつある。森林療法は代替療法の一分野であり、予防医学としての健康増進、合併症対策、リハビリテーション等へのアプローチとしての可能性を秘めている。(本杉)

森林は本能的なリラックス効果をもたらすと同時に、快適性や調和を感じることで、より積極的な健康効果を得られるという特徴を持つ。森林セルフケアは、森林という空間の中で自分の感情に気づき、ありのままの自分を尊重することで新しい一歩を踏み出す力をサポートする。また、自分で選び、実施し、検証するというセルフケアの過程で、本当に自分に必要なものを選びとる力が身につく、これからの時代をよりよく生きる力を高め、心の復興につながると考える。(飯田)

【森林療法的なアクティビティ体験】

身体と心を観察するアクティビティを3つ実施した。森林内を歩く時は、自然観察や参加者との会話ではなく、自分が森林のどんな要素に快適性を感じるかにフォーカスすることを促した。

1. 樹林気功(飯田)

呼吸は自律神経と連動していることを意識しながら、呼吸とともに身体を動かす樹林気功を行い、気功の前後での身体や呼吸の様子を観察した。

2. 誰かからの手紙(本杉)

環境教育で使われているアクティビティを森林療法的に使うことの体験として、詩の一篇を参加者に配布し、手紙の差出人を森の中で探した。その後、一人で静かに過しながら返事を書き、シェアリングを行った。

3. 運動療法的ウォーキング(飯田)

生活習慣病に有効とされる中程度の運動となるウォーキングを実施した。中程度の目安は脈拍 120 回/分、呼吸は速くなるが隣の人と会話ができる程度とした。5分間のウォーキングの前後に脈拍を測定し、ウォーキングの身体に与える影響とともに、心や感情に与える影響も観察した。

【ワールドカフェによる対話】

アクティビティで感じたことをシェアする場として、ワールドカフェという手法による対話の時間を設けた。1 テーブル 4～5人ずつに分かれ、1回15分のセッションを3回実施。各セッションでメンバーを入れ替え、テーマも変更した。セッション1「このプログラムにここまで参加して、今感じていることは何ですか?」

森林の中で身も心も軽くなった、自然との一体感を感じた、気功は恥ずかしかった、モヤモヤが残っている。怪しさを感じるなど、多様な感想が飛び交っていた。

セッション2「セルフケアが今後、自分にどう活かされると思いますか?」

リラックスする時間をとりたい、近くの神社や並木道などで活用したいという自分への実践の他に、自然ガイドや環境教育のイベントなどで取り入れたいというインタープリターならではの意見もあった。

セッション3「森林療法は日本の復興にどのように活かされると思いますか?」

大きなテーマ設定だったが、自己との対話などの内面への影響が震災復興のメンタルケアの側面で活用できるのではないかとという声があがった。

【まとめ】

参加者からは、「自分との対話」「他者との対話」「他者との絆」「森とのつながり」についての大切さを認識した、また、森林療法とセルフケアの今後の可能性を考えたなどの感想があった。今回のワークショップでは、環境教育の分野での森林療法の潜在的なニーズを認識した。今後、環境教育のネットワークの中に森林療法のネットワークを作ることで、森林療法が広がる可能性を感じた。

里山応援ネットワークを作ろう！ワークショップ

実施者：菅山 明美・角田 直美(NHKエンタープライズ 里山応援ネットワーク)



【自己紹介・アイスブレイク】

自己紹介は、隣同士に座っている人同士でペアを組み、事前に配布した1人3枚の紙に自分の相手のキーワードを書いていく方式で実施。

3枚のうち1枚は相手のワークショップ時間内のニックネームを書く。各ペアのディスカッションでは、最初緊張していた参加者たちが、笑顔に変わり、笑い声が起き上がっていた。自己紹介後それぞれがお互いの相手を参加者全員に紹介し、それぞれユニークなニックネームを披露した。

【滋賀県高島市針江についての説明】

“里山”をキーワードに2004年に針江を番組で紹介した後、京阪神の見知らぬナンバーの車が押し寄せてきた。視聴者からすれば放送された所は入ってもいいという感覚があったのだろう、川べりは各家の敷地内にあるので見知らぬ人が敷地内に入ることが起きた。そこで見知らぬ人から子供を守るために委員会を立ち上げ地元の有志から有償のガイドが集い、見学可という家のみを案内した。そうして得た収益の30%は集落の環境設備にあて、また見学可という家に、毎月2000アイカ(地元通貨)を支払った。

また、観光に伴う町の景観を良くするために、ゴミ拾いや自動販売機の撤去、竹藪の整備(竹はカップに使用)などの結果、この集落全体が整備、美化され、上手に自然と共生している里山の風景がそこに出来上がった。

【グループワーク】

「里山を守るためには」というテーマでのグループワーク。各グループ(ヒト・モノ・カネ及びその他)3つがそれぞれに別れ、それぞれが解決策を話し合った。

モノのグループは、特色とスターになる里山とは？

ヒトのグループは、スターになるためとは？

とそれぞれのタイトルを決めて話し合った。

【各グループの発表】

1、ヒトのグループ発表

里山には自主性、笑顔、よそ者を歓迎する心の持ち主などの人が必要であり、そのような人を入れるには有名な里山訪問、山村留学、地元と外との交流や派遣、里山を知るきっかけとして山ガール、雑誌、神社祭りや農家レストラン等で盛り上げる。

2、モノのグループ発表

特色として自然があり名物料理があり歴史がある。そして活性化のためには地域コーディネーター(その地域に住んでいる人)と里山ガールや現代アイドルに沿ってSTD48?里山総選挙?でもやればいいのか。

3、カネ・その他のグループ発表

税金の地産地消、名産、宝探し、それ以前に現地調査にて住民と行政の関わり、地域の人と里山の関わり、人間関係や何がその地域で幸せなのかを知る必要がある。アカデミックに学生を対象にスタディツアー研究をする。学生が行くとその地域が心を開くのではないかと。

【まとめ、今後について】

3つのグループの合意形成を図ることは難しいが、それぞれの立場の意見を理解し、学習を深めることができた。今後は、このワークショップで出た意見を参考にして里山文化再生のために、里山応援ネットワークを發展させ、地域復興のため5年くらいを目安に計画を立てていきたい。そして、里山を守るため応援ネットワークを構築していきたい。



0 から仕事をつくる～体験からチームを作る～

実施者：高見 滋(NPO法人都留環境フォーラム)



【自己紹介】

ワークショップ実施者と参加者の自己紹介
参加した動機などを聞いていった。

【チャレンジジャーニーとは】

チャレンジジャーニー（以下、CJ）とは、アクティビティを体験するなかで、他者との関係性や個人の感情をもとに、チームの一員としてのあり方を学んでいく教育手法です。

アクティビティの体験を通して、参加者は、成功することで達成感や有能感、一体感を、失敗することで挫折感や無能感、孤独感など、すべての感情を味わうことができます。アクティビティでは、あえて失敗させることにより、感情の谷を作り、成功したときの感情の幅が大きくなるように設定をしています。一般的な体験学習では、感情曲線をなだらかに設定されていることが多いため、この特徴はCJならではのものです。

また、CJでは、「Doing, Being, Space」という3つの視点を大切にしています。Doing（やり方）には、行動や習慣、考え方が含まれています。また、Being（あり方）には、人の価値観や存在意義が含まれています。Spaceとは場の雰囲気や天候などを指します。参加者はDoingとBeingの両方を学び、気付くことにより、自分らしく豊かに生きることを目標とします。スタッフは、この3つの視点から個人やチームを捉え、課題王（ルール設定）や声かけを交えながらプログラムを組み立てていきます。

以上のように、「感状曲線」と「Doing, Being, Space」を大切にすることにより、参加者は「コミュニケーション能力の向上」、「主体的な行動」、「一体感のあるクラス」といった効果を期待することができるのです。

【チャレンジジャーニー 実施】

① ワープスピード

はじめに、ボールを用いて名前を覚えたり、簡単なゲームを行いました。ファシリテーターからは課題王を与えられましたが、参加者同士で相談することにより比較的簡単にゲームをクリアすることができました。

② 「クモの巣」

クモの巣とは、クモの巣状に張り巡らされたロープの隙間を、ロープに触れることなく、反対側に通り返けるアクティビティです。ロープに1人でも触れてしまったら最初からやり直しであり、グループ内で作戦を立てながら全員通り抜けを目指します。

当初は、大きめの隙間から抜けていくことを試みましたが、ロープに触れてしまい、なかなかうまくいきませんでした。作戦を立て、1人、2人と徐々にではありますが、通り抜ける人数は増えてはいくものの、小さめの隙間や上部に位置する隙間などではロープに触れてしまい成功しませんでした。いつ終わるのか不安もありましたが、相談を重ねることにより、解決策も見えてきました。難所をクリアするたび、グループ内の団結力は増し、それぞれが課題解決に向けて役割を持ち、協力するようにチームは変化をしていきました。そして、最後の1人が無事通り抜けたときには、チーム全員で抱き合いながらゲームクリアを喜びました。

【チャレンジジャーニー 誕生の背景】

CJは、都留市から1年半分の補助金を給付される形で、スタートしました。営業や広報など慣れないことばかりでしたが、継続することにより、認められ、スキルアップにも繋がりました。

また、プログラムを開発する上で、大切にすることは、お客様（学校）の要望を考えたことです。CJには、学校の要望を取り入れ、教員がプログラムをしやすいような仕組みを取り入れています。

【ボランティアスタッフの感想】

CJを実施後、参加者は「気持ちよかった点」、「自分の役割」について2人1組で振り返りを行った。「気持ちよかった点」については、「全員が通り抜けることができた瞬間」や「チームの団結力が増した瞬間」といった感想が述べられました。また、「自分の役割」については、「声かけ」、「補助」、「作戦を練る」などアクティビティのなかで、それぞれが役割を持って行動をしていたことが伺えました。

『ワールドカフェ～自分発！未来をかえる価値観考～』

実施者：樋山 和恵・遠藤 亮(柏崎・夢の森公園)



【目的】

・大人数の集まるミーティングで起こりがちな「名刺交換はしたがるその後につながらない」「自分ごとに立ち返る時間がない」などの問題意識から、「となりの人の声に耳を傾ける」「伝え合うことで近くなる」をキーワードに対話を重視したワークを実施した。内容として、個人が現在抱えている問題の背景にある価値観について、対話を通じて個々の考えを深めていくことを目的とした。

【参加者】 合計9名

参加者5名、学生ボラ2名、スタッフ2名
自然学校職員を始め、一般企業、公務員など、幅広い業種の参加者が集まった。

【あいさつ、チェックイン】

全員が円座になってスタート。はじめにアイスブレイクも兼ねて「何のためにここにいるか」をテーマに1対1で会話。握手を交わしながら全員と話した。

その後、実施者からワーク全体の概要を説明し、チェックインとして「氏名・所属・活動・今の気持ち」を全員で輪になってシェアした。「話すことで緊張がほぐれた」などの言葉があがった。

【インタビューゲーム】

①活動をはじめたきっかけ ②問題だと思っていること ③その問題を考えたときの気持ち

2人組をつくり上の3項目についてお互いに聞きあった。「聞き役は聞くことに徹する。否定しない。答えたくないことは答えなくてよい。」をルールに7分ずつ聞きあった。インタビューした内容は文章にまとめ、他己紹介として発表した。このワークは各自の問題点を挙げることに加え、「聞く」ことを意識する練習となった。

【ワールドカフェ】

3つのテーブルに模造紙を広げ、発想を広げるツールとしてペンと粘土を用意した。1テーブルに3人ずつ着座し、15分×4回の話し合いを行なった。3人グループのうち1人はそのままテーブルに留まり、残り2名は他のテーブルに移動していくという方法で話を深めていった。

話し合いのテーマとして、インタビューゲームで挙げられた問題を踏まえ「これらの問題はどんなマインドセットからきていると思いますか?」「マインドセットを外したときに見えてくる可能性は?」という問いを実施者から提示した。ここで「ある問題を引き起こしたのと同じマインドセットのままで、その問題を解決することはできない。」というアインシュタインの言葉も紹介した。

ワールドカフェの中では「競争」「環境×経済」「一つの尺度にとらわれない」ほか多岐にわたった話題があがり、各人が考えを深めた。

【チェックアウト】

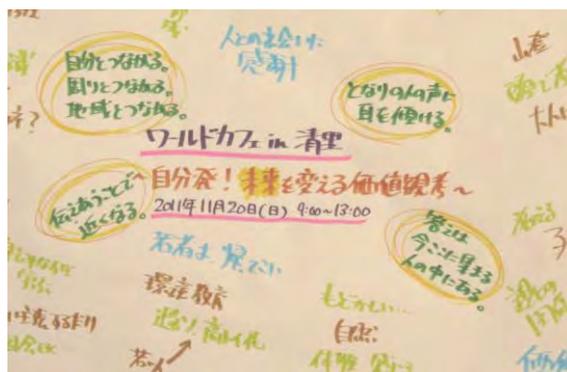
全体のまとめとして、一人一人が今日の感想(その場で思った気持ち、ワークを通じて感じたことなど)について話した。「心地よかった。楽しかった。」「自分事として話せた。」など少人数による対話から感じたことが主に話された。また、「はじめのテーブルに戻ってきたとき、それまでの話し合いの形跡(文字や粘土)が残っているのがおもしろい」という手法への感想もあった。

【ボランティアスタッフの感想】

自分自身も、ボランティアスタッフとしてではなく、参加者として、参加させていただいた。実施者が投げかけた「マインドセット」という言葉は非常に難しく、他の参加者の方と意見交換をしていく中で、さらに答えを出すことが難しくなっていく。ワールド・カフェという手法は、多くの人が参加するイメージだったので、少人数での活動も非常に面白いものであるということを感じた。

【実施者の感想】

3.5時間をたっぷり使い、講師対参加者という講義形式ではなく、全員が参加者として話し合うワークを行うことができ実施側もよい経験となった。皆さん真剣に、そして温かい気持ちで互いの話を聞き合う姿が印象的で、人が集まって発生するパワーを感じた。また、休憩時間に提供した公園産どくだみ茶と米粉クッキー、甘柿が好評で公園らしさが出せたかなと思う。コテージが会場であったため、窓から見える青空、日差しが心地よい時間だった。



修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～

実施者：星野 文紘(庄内農文化交流推進協議会、羽黒山伏)

加藤 文晴(庄内農文化交流推進協議会)

中野 民夫(立教大学ESD研究センター)



【概要】

9:00～9:30 概要説明

9:30～11:15 修行

11:30～12:30 振り返り

【修行のルール】

- ① 説明(オリエンテーション)はなし
- ② 他の人とお喋りはなし
- ③ 先達が「お立ち」と言ったら、それに対して参加者は「受けたもう」と返す(何を言われても「受けたもう」と答える)

基本的にはオリエンテーションをすると参加者に先入観を与えてしまうため行わないことにしている。しかし、今回は3時間半という短い時間しかないため、簡単な概要やルール説明のみ行った。といっても、オリエンテーションは修行の3つのルールと、先達と呼ばれる、いわゆるガイド役をとにかく真似てみることや、世俗(普段の生活)を忘れて自然に身を委ねてみるということといった簡単な説明のみに終わった。修行のルールの2つ目にもあるお喋り禁止の理由も似たようなもので、自分のセンサーをフル回転させ自分の中で深く感じ・考えるためである。他人と話してしまうと口から言葉を発することで感じたことや考えたことが頭から抜けてしまうことも理由の1つである。

今回は参加者の皆さんに山伏(修験道の行者)の気持ちを少しでも味わって頂けるよう、装束の一部を用意し、レクチャーを交えながら身に纏うところから一緒に行った。

【修行中】

今回の修行は、清泉寮に続く森の中を、途中4回ほど立ち止まり自然への感謝を心に全員で般若心経を唱えながら1時間半ほど先達についてひたすら歩くという内容であった。先達の吹くホラ貝の音色と参加者の声が森の中で響き渡り、森とのコミュニケーションを介しているようにも感じた。非日常的な修行の世界において、普段の私たちの生活を見直すきっかけ作りができたのではないだろうか。

【参加者の感想】

- ・上手く言葉で表現できないが、今回山に入ったことで、「気持ち良いな」「この場所は歩きづらいな」「よし、頑張ろう」と思いながら過ごせた。観光客をみるとほっとした。
- ・人から教えてもらうだけではなく、自分で気づくことの大切さを感じた。
- ・自分の知識が邪魔をしたかな。なぜ風は吹いているのだろう、なぜ水は流れているのだろうといった簡単な気づきを大切にしたい。
- ・少しずつ雑念ではない部分が増えていった。
- ・普段の森の見え方が変わっていった。普段、体験プログラムを開発している側として、モノが見えるプログラムを開発していきたいと思った。
- ・喋らないというルールが良かった。余計な方向に向いていたエネルギーが行くべき方向に向いて、意識がクリアになった。自然の中で聞こえてくる音の響きも気持ちが良かった。
- ・先達がホラ貝を吹いているときにその振動が自分のなかにも伝わってきた。自然との一体感を感じた。
- ・全ては言葉にできないが、いつもより自分の呼吸に意識が向いた。吸って吐いてという動作をこんなにも意識したことはなかった。また先達を遠くから見ていると安心感が湧いた。
- ・雑念が無くなるまでとはいかなかったのですが、今度は無くなるまでとことん歩いてみたい。伝える元にあるものをもう少し追求していきたい。
- ・徐々に自分と向きあえた、充実した時間だった。集団行動であるのに全て自分に返ってくる、そこがナイトハイクなどのプログラムとは似ているようで違う点だと感じた。最近の生活からは長く歩くということが減っているのだなと感じた。
- ・普段の生活において祈ることもないため、未だに違和感がある。でもそれも含めて修行なのだなと受け入れることを改めて感じた。
- ・伝えるときにコミュニケーションを介しているのはどれだけ色を付けているのだろうと感じた。先達の伝え方とは全然違うのだなと思えた。
- ・普段の生活における科学的なものの見方というのはとても毒されている。今回の体験は非常に新鮮だったが両方のバランスが必要なのではないだろうか。
- ・仕組みとしての修験道や先達のありかたに感動し、伝える人には伝わるのだなと自分でも感動した。会社では元々結果ありきの生活をしていたので、日本に昔からある精神性を取り戻さないといけないのだと思う。今の科学では説明できる部分が限られているし、いろいろな知恵があるのだなと改めて実感した。これからも先達と一緒に考えていきたい。

災害救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方

実施者: 広瀬 敏通(RQ市民災害救援センター)・佐々木 豊志(くりこま高原自然学校)

【自己紹介】

参加者の自己紹介では、「3.11以降の過ごし方」と「震災との関わり方、接点」について発表し合った。『活動としては募金をした程度だが、震災と無関係ではいられないと感じている』『釜石で長期支援活動をしている』など、様々な声が挙げられた。それぞれが震災への想いを抱き、またそれぞれに生活を送っている様子がうかがえた。企業人から学生、教師など様々な立場の人が参加していた。

【プレゼンテーション】

話の柱として、4点を抜粋する。

●RQ 市民災害救援センターについて

まずは RQ 市民災害救援センター（以下 RQ）についてのプレゼンテーションを行った。東日本大震災の救援・復興活動を支援するために全国の自然学校関係者や、環境教育、野外教育、地域づくりの実践者・研究者が「被災者の緊急支援と被災地の再生」を合言葉に集ったネットワーク組織が RQ である。自然学校の特徴が、災害時には変化に柔軟なネットワークとなり、震災直後から動き出すことができた。

●暗黙知と形式知

次に、自然学校と公の学校との違いの実施者（佐々木）的解釈についての説明があった。

- ・体験を通して身につく知、体験学習、生きる力＝暗黙知
- ・記号や文字に書き表すことのできるもの、概念学習、学力＝形式知

形式知、暗黙知共に必要なものであり、バランスよくあることが理想だが、災害支援、特に RQ のような組織は、組織として暗黙知を持っている、というように言える。

●冒険体験

安全な場所、心地の良い場所（＝C ゾーン）を超えることが冒険体験であるが、C ゾーンは避難所と捉えられ、そこを超えて自発的に復興へ向かう行為は、変化を生む・現状を打破する行為であるとし、震災で自然学校が試された被災体験は、冒険体験そのものと言える。

●災害教育としての RQ

RQ の特徴としては、アメンバー組織であり、どこを切り取っても動くものであること。また、RQ はみんながボランティアであり、責任者がいないということで、一人ひとりが責任を持つような、自立した運動体である。そして、災害ボランティアをやる人々の心としては、「ポジティブ」「前向きな」心を持って活動を行っている。そうしたポジティブな動き、災害から得られるもの、という点で「災害教育」も語られた。災害は悲劇であるが、災害

は自然現象である。だから、災害から「絆」や「仲間」、「志」といったものを得られるような、人の貢献的感情を人格の成長の資源として捉え、教育形態に位置付けようという取り組みが災害教育である。RQ はこれから、一般社団法人 RQ 市民災害教育センターとして生まれ変わる。

【グループディスカッション】

プレゼンテーションに続き、グループディスカッションを行った。まず、「災害救援組織に何が必要か？」を個人で書き出し、グルーピングをした。そこで 4 つのグループに分けられた。そしてその後、グループで「そのキーワードを得るためには何が必要か？」を話し合い、各班より様々な意見が発表された。

・動ける“人”、機動力

日ごろからの志を同じとする人たちのネットワークが必要なのではないか。そして、SNS などをつなげる体制も持つておくこと。動くためには志、モチベーションがないとはじまらない。また、人の集まりの場としては、自由に意見が言える場である、ということや、リーダーを回すことが必要。絶対的なリーダーだとその人がいないとダメになってしまう、等の意見。

・組織、体制、お金

被災者の命を守るリーダーの存在が必要である。率いていくようなキーパーソンが存在が現在は弱まっているのではないかと。日頃からのリーダーの存在が必要。また、ルールや体制整備、自治の仕組みなども、普段から作っておく必要があるのではないかと。（町内災害長や自助支援組織）

・ネットワーク

どこへどのような支援が必要かなどの内部への情報伝達、そして、外部への情報伝達も社会全体でやっていく必要がある。被災地にいない方に現状を知らせることも必要。また、ヒューマンネットワークとして、地域とのつながりや、日ごろの人とのつながりが支援を円滑にするのではないかと。信頼関係を構築しておくことが重要なのではないかと。

・暮らしの技術

今回は自然学校が外から技術を持ってきたが、地域の中であるとしたらお年よりが知恵を持っているはず。そうした縦の地域運動や知恵の伝達の仕組みができれば、災害時に役に立てることができるのではないかと。

ESD×CSR:サステナビリティ教育指針を体感！

実施者:中野民夫・川嶋直・吉澤卓・中西紹一(立教大学ESD研究センターCSR チーム)



【ねらい】

持続可能な社会の実現には、企業の役割が重要。これからのCSR（企業の社会的責任）としても、ESD（持続可能な開発のための教育）に積極的に取り組むべきだが、現状はまだまだ。そこで立教ESD研究センターでは、企業向けサステナビリティ教育の指針を作り、体験的なプログラムも作った。

【概要】

(1) セヴンの映像や世界の課題ファクトカードで導入
まず、1992年リオの環境サミットでのセヴン・スズキのメッセージの映像を見て、2012年のリオ+20に向けて、企業や教育の現場ですべきことは何か、意識を高めた。

そして、「ファクトカード」を使ったミニワーク。これは、30枚1セットのカードで、各カードに世界の貧困や環境問題などの現状が記載してある。これらから、各自が気になった内容のカードを1枚選ぶ。カードの裏には解説もある。選んだ理由や内容を発言しあうことで、相互に世界の課題への関心や共感をシェアしあう。

(2) 「次世代CSRのためのサステナビリティ教育指針」の解説

次に、長年のプロセスを経てまとめあげた「サステナビリティ教育指針」の解説。企業にとって、持続可能性への対応を誤ったり、敏感な対応ができないとリスクになるし、積極的に対応できればチャンスにもなる。そのためのガイドラインが、「3つの公正」と「3つのアプローチ」だ。

「3つの公正」とは、私たちの暮らしや事業が未来に影響しているという点での「世代間の公正」、現在の国内外での人と人との「世代内での公正」、そして自然・生態系と人間の「種間の公正」、の3つを実現しようということである。これら「3つの公正」な視点を持つことが持続可能な社会を実現するための基盤。しかし、私たちの視野は狭く短期的なため、「3つのアプローチ」が必要になる。

「3つのアプローチ」とは、「参加・体験」を大切にしたい学び、多様な人々との「対話・協働」、先住民など地域固有の「知恵や文化の再評価」のことである。この「3つの公正」×「3つのアプローチ」を実践し、積極的な取り組みを行なうことが、持続可能なビジネスの創出に繋がる、というのが指針の眼目だ。

(3) 具体的な企業を例に、サステナビリティを考える

最後にサステナビリティ・コンサルワークを実施。まず各企業の今後の姿を、名詞的に捉えるのではなく動詞的に考えるところから始める。たとえば、従来の「エネルギーを供給する会社」という定義を、「地球を元気にするエネルギーを作る会社」として捉えたりすることで、視野や幅も広がり、マルチな方向性も見出すことができる。そしてこの今後の姿に、何をどうしたらサステナブルになるのか、各グループで話し合い、模造紙にまとめて発表をした。それぞれの専門性を生かし、多角的な視点で固定概念を打ち破る柔軟な考え方ができるかがポイント。エネルギーの地産地消や無人島キャンプ、「国民森の日」という休日を設けるなど、ユニークな考えも多数生まれた。

【まとめ】

まだあまり知らない企業人向けにシンプルにまとめた「指針」も説明するだけでは身にならない。それをもとに、自ら話し考えるなど参加や体験を通して実感し、具体的な企業を例に考えてもらうプログラムを実践。多様な人々が集まり意見を交わし、知恵を出し合うことで新たな提案が生まれることを確認できた。



やったらできた！エネルギー系企業と弱小 NPO のコラボ

実施者：河野 格(NPO法人都留環境フォーラム)

富手 裕子(コスモ石油エコカード基金)

【目的】

環境教育業界で今後ますます企業と NPO との協働が求められるようになる。そんな中、企業はどのような企画を求めているのか。模擬企画作りを通じ環境教育における企業の肝を学ぶ。

【スケジュール】

1、「あいさつ」

ワークショップの趣旨、目的確認、本日の流れの確認をした。

2、自己紹介の時間

アイスブレイクも兼ねた二人組の自己紹介。「所属」、「氏名」、「日頃の活動」のほか「生物多様性をテーマに活動するとしたら何をやる？」をテーマに自己紹介し合った。短い時間で、ペアをどんどん入れ替えて、なるべく多くの方と話すようにした。

3、情報提供の時間

【コスモ石油エコカード基金とは -企画作りにおける企業側の参考情報-】

コスモ石油エコカード基金とは、エコの機能を追加したクレジットカード(元々はガソリンを入れる目的のカード)が生む、カード1枚あたり500円の資金とエコ商品などの売り上げの一部から成る基金。2002年4月に、お客様からの「地球のために何かしたい」というニーズから生まれた。年間約1億円を運用しており、約8万人の会員がいる。コスモ石油の企業理念は地球環境との調和と共生であり、コスモ石油エコカード基金は持続可能な社会の実現を目標とし、地球温暖化(ガソリン会社であり二酸化炭素を出すことに加担しているため)と生物多様性の保全の問題に対しアプローチし、国内外の環境修復、次世代の育成をテーマにしている。

【都留環境フォーラムとは -企画作りにおける NPO 側の参考情報-】

2009年11月に設立したNPO。環境を軸としたまちづくりをコンセプトとしている。働けば働くほど環境が良くなる「グリーンカラー」の創出や地域における環境教育の仕事やエネルギーなどの自立を目指す。コスモ石油エコカード基金と協働しているムササビとともに暮らす里山再生プロジェクトは、ムササビの生態調査の研究、森林環境の整備、木質バイオマスの利用促進を目的とした、環境保護とエネルギー供給を同時に展開するモデルだ。その後、参考までに、都留環境フォーラムがコスモ石油に提出した応募用紙を公開。この申請時資料をヒントに、参加者も企画をつくっていった。また、都留環境フォーラムのプロジェクトをヒントに「採択の肝」を提示する旨を伝えた。参加者にはこの「採択の肝」を引き出す質問をしてもらった。

4、ワークの時間

<条件の提示> 以下の条件を元に3人1組のチームで企画づくりを行った。

- ・「生物多様性を守る活動」
- ・「エコカード会員の参加が可能であること」

コスモ石油を例に、企業が納得できる企画をつくれるかどうか。その肝は何かを探る。企画のフォーマットはA4の紙に以下の通り7点、記入してもらう。

① 企画内容 ② 企画目的 ③ ゴールビジョン ④ 1年目の計画 ⑤ 2年目の計画 ⑥ 3年目の計画 ⑦ 3年後の姿
ワークショップ上、「NPO の立場でコスモ石油へ企画提出する」ため、企業の方々はNPOになりきってもらった。

<企画作成> 4グループに分かれ、企画作成が開始された。コスモ石油エコカード基金にはプロジェクト選定の肝が6点あり、これをクリアすると採用されやすいことが示された。企画作り後に(一部は企画作り中)に発表された肝は以下の通り。

- ・調査及びモニタリング要素の有無
- ・ストーリー性
- ・3年後の姿が描けているか
- ・会員の参加が最大1泊2日でできるか
- ・資料の体裁
- ・活動に夢を感じるか

この肝を引き出すため、各グループ最大2回まで質問でき、短い時間のなかで考える。

5、プレゼンテーション

プレゼンテーションをして頂き、参加者の企画を共有した。

- ・1班：長良川上流地域の保全によるオオサンショウウオの保護
- ・2班：ゴルフ場の森林再生
- ・3班：里山再生による日本の原風景の復活
- ・4班：ピオトープ活動による在来固有種の保存

どれもこの短時間で、しかも初めて会った方々と協働で作ったとは思えない企画だ。コスモ石油からの総括は、「全員採用」ということで、それぞれ生物多様性を守るプロジェクトであることが評価された。

【おわりに】

河野：NPO サイドの姿勢として、いかに企業と寄り添っているか。助成金をもらうという感覚では企業と共同できない。企業の要求は全て呑んだ上で、やりたい想いを伝えすり合わせていくことが大事である。

富手：企業サイドの視点として、企業の常識とNPOの常識が異なる。助成金だけもらい、口出しをさせないNPOが少なからずある。企業が求めていることを考えて欲しく、話し合いができるNPOとご一緒したい。

環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門

実施者: 齊藤 透(月の会)



【目的と実施内容】

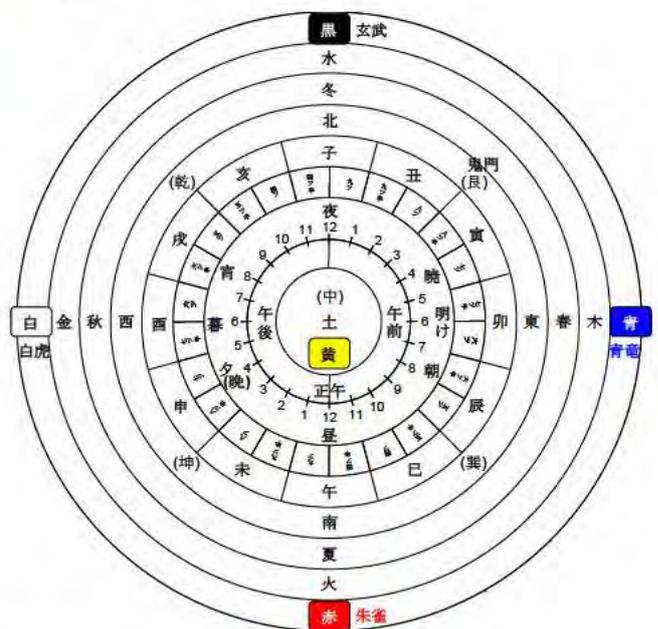
- 1 旧暦は非科学的な俗信ではなく、精緻な天文学に基づくものであることを伝える
 - ・ 旧暦の仕組みの基礎の解説
 - ・ 月の満ち欠けを模型で実験し得
- 2 暦は時間・空間の把握システムであり、文化の土台であることを伝える
 - ・ 文化を読み解く際に便利な簡易羅針盤の解説
- 3 旧暦で季節を楽しむ(旧暦を用いると季節に鋭敏になる)
 - ・ 旧暦の太陽暦部分、季節を表す二十四節気七十二候の解説
 - ・ ネイチャーゲーム「わたしの暦」で、七十二候を制作し体感を伝える

【旧暦の基礎解説】

		月との位置関係→朝夕、生殖のリズム	
		表す	無視
太陽との位置関係季節	表す	太陰太陽暦(旧暦) ・「日にち」は「月の形」を表す ・季節は二十四節気七十二候で表す(季節を感じ取ろうとする努力により、季節に鋭敏なる)	太陽暦(現行の西暦) ・「日にち」に意味がない ・毎年同じ日に同じ季節が到来する(季節の把握には便利だが、安易過ぎて逆に、季節に鈍感になる)
	無視	太陰暦(旧暦) ・「日にち」は「月の形」を表す ・季節は表さない	X

【文化を読み解く際に便利な簡易羅針盤】

- ・ 暦とは、「時間と空間の把握システム」であるため、ものの考え方や文化の土台となる
- ・ 大化の改新(645)頃～明治5年(1872)の1200年に亘り、旧暦の思考方法の下で培われた日本文化 → 日本人の時間感覚と合う旧暦



【ネイチャーゲーム「わたしの暦」で個々人が作成した七十二候の作品例】

- ・ 「凜風頼伝」りんぷうほまつたう
- ・ 「柔白飴食辛」ソフトクリームたべるにつらし
- ・ 「頭微白富士」あたまかすかにしろきふじ



自然感を耕す 自分と里地里山里水が元気になるワーク

実施者:佐藤 洋(都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター)・小林 克也(都留市役所)

【目的】

自然に触れていると、自然を観察しているようで実は自分の心の中の観察を通して自然を観察していることを体感。体感したことを言葉にし、誰かに伝え、観察への入り口をつくる。自然からのサインや気持ちを汲んだりするトレーニングを続けることで六感が研ぎ澄まされていく。自然にかかわっている参加者が、それぞれの土地にあるもので実践していけることを目指す。

【WSのポイント】

自然から、他者から、自分がないものをもらう・受容、多角的視点を育てる、自然から知恵をもらい普段の暮らしに生かすことができる。

【内容】

○切り株積み選手権「大人が動き出す、知らないうちに元気に」
4〜5人ずつグループに分かれ、グループごとに切り株(間伐材の積み木)を一つに積んでいく。時間内にどれだけ多く積み上げられるかを競う。ルールは全員がかかわること。

<参加者の様子>

対戦のたびに振り返りと目標設定を重ねて、だんだん遊びに本気になっていった。次第にチームの中でコーディネーターが生まれたり、人間模様が出てくる。シンプルな遊びを本気でやるからこそ、関わり方や素が出る。気づいたら楽しくなっている。

○自分を自覚するワーク

マトリックス9シートを使用

質問項目:今の気持ち/森と私の関係(距離)/土を食べると自分の体と感覚はどうなるのか/寒くなりそうな冬、あなたはどよう過ごす?/クモが家に入ってきた。あなたはどようする?/あなたの癖は/南向きの窓にハチの巣が。さてあなたは…等
<共有タイム>

今の自分の状態を知る。WSの終わった後では、どよう変わるか?

○自然感をトレーニングする—リスから自分を客観視する

個人戦:リスがいない場所に行ってみる(屋外へ移動)

・個人で、図鑑なし、生まれながらに持っているもので行ってみよう(誰とも話さない!)

リスの暮らしを想像

リスの知恵・秘密とは?

<共有タイム 振り返り(他者視点をもらう)>

団体戦:観察したことをもとにチームに分かれてさらに深める

・リスの暮らし・知恵、秘密は

リスのいそうな場所の条件、模造紙にかき出す

知識のある人がいるチームは、さらに深くまでチームで想像

・チームごとに感察・想像した暮らしを、劇の形にして全体で

<発表・共有>

リスの巣はどこにあるか、天敵は、エサを隠す場所は、鳴き声はなどの謎に迫るチーム、

起きてから寝るまでの、食事、遊び、夫婦生活など家族の一日の流れを想像したチーム、

リスの方が人の観察(エサをくれるか等)をしているのでは?!

という発表もあった。

<まとめ—「多角的感察」という方法>

調べて知るという方法では、「感じる」ことができない。実際に山に入り、目で・音・匂い・気配…で山を感じる、山から気づきをもたらす、そんな“感察”のやり方もある。

からだ・五感(六感)を使い、自分で確かめて積み上げていく学問。

○リスになってみるワーク

生き物の暮らし、その知恵を知ることで普段の暮らしに生かす

・たとえばリスの巣材…空気をよく含み、熱効率のいいつくり

→このリスの知恵を暮らしに生かせないか?燃やしてみるとわかる(火つけ材に最適)

・リスになって丸太から巣材づくり

杉ヒノキの丸太から樹皮をはぎ…どうしたらリスの巣に近づけるか?皆しばらく夢中、無心になって手を動かしていた。

○OWS全体の振り返りと共有

参加者から:(リスになるワークで)夢中になった。実際に五感が働いた瞬間/リスの気持ちは想像できなかったが、自分の感覚もリスの感覚も楽しみたい/みんなで話すことで自分にはない視点に気づけて、面白かった/「なんで?」が自分を動かすエンジンになると気づいた/考えるだけでなく、リスの気持ちになって実際に動いて「わかる」、それがよかった/なりきって想像する時間、実際に巣材づくりなど「する」ことで気持ちに近づけた。自分でもこういうプログラムを作りたい/大人が仕事以外の何かで一生懸命になるって楽しいなどの意見・感想が出た。

主催者から:ハチが家に巣をつくるなど、自然との接点は日常にある。そのときハチ(相手)を排除するのではなく、その生き方を知ることで、彼らと付き合っていくこともできる。関係を断つのではなく暮らしの中で行動してみると、理解していける。

生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版

実施者：京極 徹(公益社団法人日本環境教育フォーラム)



【参加者】11名(男性5名,女性6名)

※ワークショップは、6人1グループと、5人1グループ、計2グループに分かれて行った。

【自己紹介】

まず始めに、アイスブレイクとして、実施者と参加者全員が自己紹介を行い、それぞれの所属と名前を発表した。

【生物多様性まんだらゲームを開発した目的について】

このゲームは、2010年10月に名古屋で開催された生物多様性第10回締約国会議(COP10)を契機に、地球温暖化に比べ理解しづらい生物多様性の意味を、広く人々に理解してもらう為、地球環境基金の助成金事業として開発されたものである。

【ウォーミングアップ】

ウォーミングアップとして、A~Fまでの6つの絵が描かれたA4用紙を1人1枚ずつ配布し、描かれてある6つの絵を繋げて、自由にストーリーを作るというゲームを行った。時間は10分間で、他の人と相談せず、1人で行った。ストーリーを作った後、グループ内で、1人ずつ作ったストーリーを発表した。傑作選として、それぞれのグループの代表が1人、全員の前でストーリーを発表した。発表後、6つの絵が「風が吹けば桶屋が儲かる」という日本のことわざを表していることを説明した。

【生物多様性まんだらゲーム体験】

カードは全54枚で、1枚1枚違う写真で構成されている。そのカードを組み合わせ、自由にストーリーを作れるようになっていく。カードは1グループに1束ずつ配布した。

まずは、縁がオレンジ色のジャングルに関するカードを5枚選び、グループで話し合いながらストーリーを作った。時間は15分間で、2グループとも同じカードで行った。

ストーリーを作り終った後、ストーリーにタイトルをつけ、それぞれのグループごとに発表した。同じカード5枚を使って作ったストーリーであったが、2グループで全く異なるものになった。最初に発表したグループは、「ジャングルに住むジャングルさんという人が、金儲けをしようとして、ジャングルに生えている植物で新薬を開発しようとし、自分の体で実験して、病院に搬送され、結局、別の薬で助かる」というストーリーであった。次に発表したグループは、「大麻を隠れて栽培し、大麻の所持で捕まってしまう」というストーリーであった。次に、縁が緑色の動物に関係するカード5枚を選び、前の作業と同様に、15分間、グループで話し合いながらストーリーを作った。同じ作業を、縁が青色の海に関係するカード5枚で行った。

10分間の休憩後、キーカードとして、電球の写真のカードを1枚選び、このカードを始まりとして、他のカードを全て使用し、グループで話し合いながら、ストーリーを作った。ストーリー作りは20分間行った。ストーリーを作った後、グループごとに発表した。ストーリー作りでは、人工のものと自然のものを分けてストーリーを作ったり、グループのメンバー1人1人に無作為にカードを配り、順番に自分に配られたカードを使って、自由にストーリーを繋げていったりするなど、それぞれのグループが工夫して行っていた。人工のものと自然のものを分けていたグループは、カードの配置がピラミッド型になっていたが、1人1人に無作為にカードを配布したグループは、カードの配置が魚の骨の標本のようになっており、同じキーカードで、同じカードを使用しているにも関わらず、全く異なるカードの配置となった。

【ふりかえりシート】

ゲーム後、ふりかえりシートを参加者に記入してもらい、感想を1人ずつ発表した。発表では「グループの皆と楽しい作業ができた」、「色んな立場の人に、生き物の繋がりを伝えられる」、「カードをぱっと見ただけでは、こんなに繋がっているようには見えなかった」、「1人1人の見方、考え方の違いが面白かった」、「様々な分野で使うことができる」、「1人1人の個性を感じた」、「自由な発想ができる」、「写真が沢山で見ているだけでおもしろい」などの意見があった。また、ゲームに対する改善点として、「小学生は縁の色で分けず、もっと自由にしたほうが良い」、「何も書いていないカードを入れ、自由度を広げたらどうか」、「自分を表すカードを入れたらどうか、カードの裏に書かれている写真を説明した文字を無くし、制限をつけるべき」、「『風が吹けば桶屋が儲かる』のストーリーを、小学生が理解できるような昔話の4コマ漫画にしたらどうか」、などの意見が出た。

PLT, WILD, WET の日本での可能性を考えよう

実施者:佐藤 敬一(東京農工大学)

【概要】

本ワークショップでは、小学校において Project Learning Tree (PLT)をはじめとした Project WILD, Project WET などのアメリカ由来のパッケージド・プログラムを取り入れることの可能性を検討した。従来の日本の森林環境教育には実践的なプログラムが掲載されたテキストがあまりみられない。そこで、PLTをはじめ WILD, WET のコンテンツを体験してもらい、実際に小学校でどのように取り入れることができるかを話し合った。

【実施内容】

Project Learning Tree

① みんな木が必要だ

机に並べられた 13 製品のうち、木でできたものとそうでないものを当てる〇×クイズである。箸やコルクなど一見して木からできたと思われるものからメガネや薬などの難問まで、さまざまな製品が木からできたのかどうかを考えてもらった。例えば、セロハンテープはパルプに含まれるセルロースからつくられている。また、頭痛薬（パファリンなど）の主成分であるアセチルサリチル酸はヤナギの木に含まれている。私たちが何気なく使っているもののなかに木を使った製品が多くあることを確かめるアクティビティである。

② 木は工場

農工大の学生が小学校の総合的な学習の時間で実際に使っているパワーポイントで説明した。形成層が木の木部と師部をつくる役割を工場に見立て、樹木の構造を説明していくものである。各キャラクターは、子どもたちにわかりやすく説明するために学生が作成したものである。このように、PLT が自分なりに手を加えていくことのできる柔軟性に富むコンテンツであることを参加者に伝えることができた。

Project WILD

③ 大親友

参加者にそれぞれ一枚の生物カードを配り、そのなかから自分のペアを探すカードゲームである。それぞれがなぜペアになるのか考え、互いにどのような利益・不利益があるのかを発表した。

このアクティビティの到達目標は野生生物の共生関係を定義するとともに、共生関係にある生きものを識別できようになることである。共生関係は相利共生（双方に利益となる関係）、片利共生（片方だけに利益となる関係）、寄生（片方に危害を加える関係）という三つに分類できる。「自分たちは三つのうちどの関係にあるのか？」参加者はペアでそれぞれの意見を話し合った。さらには応用として生物カードを使っての神経衰弱とジジ抜きを行うことで、楽しみながらも、共生関係にある生きものを自然に覚えることができた。

Project WET

④ 青い惑星

地球の風船を交互に投げ、つかんだ時の左手の人差し指がさす部分が海か陸かを言い、確率を計算する。地球のうち海と陸がどのような比率であるかを体感しながら求めるアクティビティである。今回は 100 回行ったうち、陸 41%、海 69%という比率になり本来の 3:7 と割に近い数値であったといえる。

⑤ 大海の一滴

地球上のすべての水を 10lに見立て、以下の要領で入れ物に水を分けていく。

海水	97.5%
氷	1.75%
地下水	0.7424%
汚水	0.0036%

最後に飲む水として残った水として、一滴だけボウルに落とす。ポタッという音を聞くことで水の貴重さを感じ取れるものとなっている。

⑥ 驚異の旅

参加者が水になりきり旅をする。海、雲、湖、川、植物、動物、土、氷河、地下水のブースを用意し、それぞれサイコロと色付きのビーズを置く。参加者はサイコロを振り、サイコロで当たった場所に行きモールにビーズを通していき、10 個たまったところで自分の旅した経路について発表する。「雲から雨が降って海になる」などの説明が補足され、水の成り立ち、水の循環を体感できる内容である。

【プレゼンテーション】

PLT, WILD, WET は、PLT を基礎として WILD, WET が位置づけられている。日本では森林環境教育として期待される役割が大きい一方で、海外では、健全な森林、質の高い環境教育、コミュニティや世界についての見識ある決定という包括的な環境教育プログラムであると定義されている。それは実際のテキストに書かれている内容のほかに応用的なアクティビティや説明を加えることができるという特徴にある。それぞれが柔軟性に富むコンテンツであり、コーディネーター会議などの国際会議などの場で情報交換がなされていることを紹介した。

【まとめ】

それぞれのアクティビティのなかで「どのように授業に取り入れられるか?」「どうすれば子ども達に伝わるのか?」という具体的な質問や経験談が話し合われた。コンテンツの紹介や参加者同士のやり取りを通して、本WSが PLT, WILD, WET の可能性を検討すると共に、日本の学校教育にそれらを取り入れるための積極的な情報共有の場となった。

原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～

実施者：森 雅浩(Be-Nature School)・遠藤 亮(ホールアース自然学校)

【スケジュール】

- ・オリエンテーション・ウォーミングアップ
- ・話題提供 (森雅浩→遠藤亮→藤木勇光→橋口直幸)
- ・対話セッション
- ・全体セッション

【企画主旨】

東日本大震災を受け、自然学校関係者は迅速に支援に入り様々な展開を見せている。しかしながら原発事故のあった福島県の置かれている状況は他県とはあきらかに違っている。復旧・復興の道筋への放射性物質の影響はあまりにも大きい。

振り返れば、環境教育業界も深く原子力発電に関わってきた。東京電力柏崎原発の地域振興予算（寄付）で作られる自然学校の運営を日本環境教育フォーラムが受託するかどうかを問うアンケートが正会員に実施されたが、はたして結果はNOであった。その後、違う形で柏崎夢の森公園環境学校がオープンした経緯は私の記憶には鮮明に残っている。森自身も原子力発電所を建築中（現在は工事中断中）の電源開発（J-POWER）が主催するエコ×エネ体験プロジェクトの仕事に2年前から携わり、いままも継続中である。

被災地支援や復興への積極的なかわりをもつ自然学校・環境教育関係者は今回の福島第一原発の事故やエネルギー問題にどのような感想や意見を持っているのか。真正面から原発を扱い、意見を交換する場を作りたいとの思いで、ワークショップを行うことにした。

【情報提供について】

今回のワークショップを企画するにあたりまず考えたことは、原発に深く関わっていたり、今回の事故の影響を直に体験している人の話を聴きたい、ということだ。そこで、旧知の仲であり、柏崎の夢の森公園で働く遠藤亮を実施者に誘ったところ了解を得られたので、まずはワークショップの実施者としてお互いの気持ちを正直に皆の前で話すことにした。

また、自分が関わるエコ×エネ・体験プロジェクトの藤木勇光氏に、電力業界に従事する一個人としての意見を聞かせていただくようお願いした。

また、放射能汚染にさらされる福島の自然学校実施者として橋口直幸氏には大変な状況の中、清里まで来ていただくお願いをした。いま、福島の自然学校の置かれている状況、子どもたちの置かれている状況を直に伺いたいと思ったからだ。

【ワークショップの構成について】

話題提供のあとは、ワールドカフェスタイルで少人数の対話を何回か重ねる程度のプランのみ。実際に場がどう推移するかが読

み切れなかったもので、その場で立ち上がったものを捕らえて進めていく気持ちで臨んだ。

【実施してみたの感想】

・話題提供パート

まず遠藤が聞き役になり、森が話をした。正直未整理で伝わりにくい話になってしまった様に感じている。森から遠藤へのインタビューも同じようにスッキリとしたものにはならなかった。藤木氏へもそれなりにつっこんだ質問を投げかけたが、話の内容とは別にスッキリしない感じ。誰もがそう感じたかはわからないが、どうも本当に言いたいことをストレートに言えていない、といった印象のスッキリしなさだ。正直に語ってはいるのだがなんだか違うぞ感が残った。対して放射能汚染の影響をまろに受けている橋口氏の話は、そんな違和感を感じる間もない現実が伝わってくる。子どもを森の中で遊ばせるとき、放射線量が毎時何マイクロシーベルトだと、保護者は了解するのかが感覚でつかみながら、仕方がないので独自に基準を作っていること。今の福島の子どものにはプログラムはいらない、外で遊べるだけで、それだけで十分だ。なぜなら普段は外で遊べないから……。

現実の出来事はあまりにも強く、他が全てくすんで見える。もっともこの差異は予想できたこと。だから橋口氏の話の最後にももらった。

・対話セッション

中途半端感を残しながら思い悩んだ結果、対話のテーマは各グループに任せることにした。参加メンバーには福島出身で両親が線量の高い地域にいる人、自分自身が原発で働いていた経験がある人、この事故で初めて興味を持った人、以前より独自に電力会社に原発の安全性を問い合わせしていた人、様々な背景がある。以前より原発に注目していた上級者(?)にはもっとつっこんだ話がしたかったとの感想をもらい、別の人には知らないことばかりだったとの感想を得た。

・全体セッション

少人数でのセッションを通じて感じたことを共有したり、質問を出し合った。私自身の気持ちにも変化があったのか、この段階でようやくウォーミングアップが終わって、やっと率直に話すことができるようになった印象だ。予定の3時間30分を15分過ぎて終了。それでも終わった感はない。もっともこれは当然で、原発事故はまだ収束していないし、日本のエネルギーの未来は不透明だ。だからこそ、気にかげ、かわり続けることが大切だと再認識した。

文責：森 雅浩

狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～

実施者:井戸 直樹(ホールアース自然学校、猟師)

永吉 剛(メタセコイアの森の仲間たち、猟師)

大橋 正孝(ニホンジカ管理研究者)



【目的】

- ① 自然の中でおこっていること、その本質的な原因を参加者全員で共有すること
- ② 実際に罠を仕掛けてもらうことで、狩猟を身近に感じること
- ③ 森と野生動物と人のつきあい方を考える上で、環境教育のもつ役割を知ること

【概要】

《参加者をする》(井戸)

自己紹介や一歩前アンケートで、参加者全員の問題意識や本日常びたいことなどを共有した。学生や社会人、自然学校職員、企業など所属や年齢の幅が広く、「現状が知りたい」「獣害に困っている」「猟師になりたい」「環境教育にどう生かせるのか」などの意見があった。狩猟体験をしたことがある人はほとんどいなかった。

《森と野生動物と人のつきあい方ワークショップ①》(井戸)

「鹿は増えているのか?」という問題から、「日本の森林事業」「雌鹿の禁猟」「ライフスタイルの変化」など、国の政策やわれわれの生活が、野生動物の生態にも影響を及ぼすことを、ワークショップを通じて整理した。

《日本の鹿問題の現状》(大橋)

「一体、日本の森でどういったことがおこっているのだろうか?」世界遺産や国立公園では、農林・畜産業での鹿被害が深刻化しており、そこから生態系保全のための捕獲が始まった。鹿被害の特徴としては、森林生態系を破壊するまで食べつくすことや広域的なことであり、鹿を適正密度にするために捕獲したが減らず、むしろ増えている。ドイツでは森林管理には鹿の個体数管理が不可欠とされており、森林官は狩猟免許取得必須であり、大学でも狩猟学の講義が行われる。日本の森林管理から鹿管理の意識が欠如したのは、最も野生生物が少ない時代と言われる120から50年前にドイツ林業が入ってきたため、といえる。今後の重要課題としてプロの集団による組織的な捕獲や被害者、公的な職員による捕獲等の新しい捕獲システムの構築が必要とされる。

《ホールアース自然学校の取り組み》(井戸)

自身の狩猟へ取り組むまでの経緯と、ホールアース自然学校における狩猟への新しい取り組みを紹介した。①野生生物をテーマにした環境教育イベントの実施、②ジビエ肉等の活用&アンケートの実施、③ホールアース畏狩猟チームの発足、④森づくり活動の展開。

《畏の仕掛け方講習》(大橋)

屋外へ出て、全員が罠を実際に仕掛けた。全員が「思ったより簡単、自分でもできそう」という反応を示しており、「狩猟」というものが敷居の高いものだったが、自分でもできそうな身近なものとして感じる事ができたようだ。

《猪鹿庁の取り組み》(永吉)

猪鹿庁という新しい取り組みと組織の紹介を行った。ミッションは里山保全で、「捜査一課」「衛生管理課」「山育課」「エネルギー課」「ジビエ課」「広報課」と6つの課からなる。若手猟師のツアーや、ジビエ料理などに力を入れている。

《ジビエ料理の試食》(永吉)

ホールアース自然学校の畏狩猟チームで捕獲した猪を、猪鹿庁ブランドの「いのしかちゃん」の味付けて試食を行った。野生肉は臭い、堅いというイメージは払拭し、美味しいと評判であった。

《森と野生動物と人のつきあい方ワークショップ②》

この3.5時間により、狩猟に対する見方が変わり、狩猟と環境教育のつながりを感じる事ができたようだ。代表的な感想は以下のとおり。

「狩猟免許を所得してみようと思った」「楽しくて美味しくて、実りがあった。猟師目線の自然観察という部分に興味を持った」「罠のシンプルさにびっくりした」「猟師の社会的意義を認識できた。これを知れたのが今回の成果」「保護と捕獲のバランスには葛藤があるが、環境教育や食育に活かしていきたい」「環境教育の切り口として必要だし、緊急度が高いと感じた」「狩猟という視点でみると、環境問題を総合的に見る事ができると感じた。猟師の応援になるような環境教育が必要になるだろう」「自然学校がかかわる意義があると感じた」「生態系や人とのかかわりを伝えるには、時間がかかると感じた」

2日目 夜

全体会 2

全体会2-1 「改正環境教育法」を学ぼう

環境省 環境総合政策局環境教育推進室 渡辺裕信氏

2-2 「JEEF虎の巻 ～活用術お教えします！～」

司会：(公社)日本環境教育フォーラム 京極 徹

1. JEEF 最新トピックス紹介

事務局長 林田 悦弘

2. JEEF120%活用法

企画部長 塚原 一恵

3. JEEF 学生部紹介

学生部 (日向有美、小林真人、垂水恵美子、加藤超大)

2日目 全体会2

2-1 「改正環境教育法」を学ぼう

環境省 環境総合政策局環境教育推進室 渡辺裕信氏

今日は、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」についてお知らせさせていただきます。この法律自体のことをご存知の方は、どのくらいいらっしゃいますか？半分くらいの方は知っていましたね。ありがとうございます。

実は私は、企業の方から出向という形で、7月から環境省で働かせていただいております。企業で何を担当していたかという、4年間ずっと環境の担当をやっておりまして、そういった繋がりもありまして、今環境省で働いています。

企業にいた時に、1番取り組んでいたのは、ISOの取り組みを担当していました。また、環境教育も担当していて、私は、NTT東日本の所属なのですが、キープ協会さんと一緒に社員への環境教育を清里でやらせていただいていた、今年で3年目になります。私の現在の環境教育推進室での担当は、この教育法や、日中韓の有識者に交流を進めるプロジェクトなどです。

今回は、この教育法の改正についてお話します。まず、この法律がどういったものなのか知っていただき、法律を活用して頂きたいと考えております。この法改正に至るまでの経緯についてですが、ここでは、この法律が議員立法で作られていることを知っていただければと思います。政治家の先生方の働き掛けで、この法律というものは作られています。法律の全体像ですが、環境教育の充実というものが1つ大きな柱となっております。家庭や、職場、学校、地域等における質の高い環境教育を実施すること。学校教育における環境教育の充実が1つ、それから、2つ目は環境教育等の基盤の強化、そして、体験の機会の場の認定ということで、1つ環境教育というものをしっかりと充実させて、環境問題の解決に向けて意識を向上させる。そして環境保全活動を促進するアクションにいかにか結びつけるかということが重要だと思えます。そこが、この法律の精神ではないかと思えます。それから、環境教育を充実させるために、環境行政への民間団体、NPOの参加が重要です。そこには、民間団体の公共サービスの参入機関の増大、政策形成への民意の反映、拠点機能の整備、協働取組み、パートナーシップの推進のための協定制度の導入といったようなことが、書かれています。それから、行政の取り組みということで、財政上の措置、なかなか難しいこともありますけれど、こういったことを推進していくことですか、行動計画・施策策定ということ、また、環境教育等の推進会議というものを開催するというものを今回この法律の中に新たに入れています。こういったことで環境教育を1つは充実させていけるのではないかと考えます。また、こういったことを、各主体がパートナーシップを取ることで、適切な役割分担に基づく協働体制を構築し、環境保全の活動の促進にも繋がるのではないかと、大きくこの法律に書かれています。



法律に関しては、環境省HPからダウンロードできますので、今までの法律と今の法律、新旧と見ることができますが、なかなか法律の文書を読むのは難解です。今日も全部は説明できないのですが、こういうことを書かれているのだと知っていただければと思います。

大きなポイントですが、以前は、「どこでも、だれでも環境学習」をスローガンにリーダー育成を中心とした詳細規定を置いていましたが、環境教育というものを非常に狭く捉えていたというのが以前の法律です。改正後の法律は、「幅広い実践的人材づくり」ということで、まさしく環境教育に求められているところ、本当に幅が広いというようなところなのですが、そこがきちんと変わっているということが全体的に改正のポイントとして大きいのかと思います。

中身について説明していきますが、実際の条文は、1から3条のところにて定義、目的が書かれていて、4条から各主体の責務ということで色々法律が書かれています。「国は、環境の保全に関する施策の策定、実施に当たって、国民、民間団体等と対等な立場において適切に連携を図るよう留意するものとする。」というように書いてあります。パートナーシップということ、協働ということを積極的に推進していくことが法律でも定められていることとなります。

今回の法律では、第8条の「地方公共団体の行動計画の作成」が大きく変わっています。以前は、基本方針というものを各地方公共団体でも定めるというようになっていたのですが、今回は行動計画というものを各地方公共団体でも作成するように努めるということになりました。努めるということですが、努力規定というもので、必ず作成しなくてはならないというものではないのですが、2年くらい前に地方分権ということが言われており、地方自治体に対して国が色々押し付けてやらせる、ということではなくて、基本的に地方自治は地方自治に任せる、という考え方が非常に多くなってきました。当初、この法律を改正するときは、努めるという努力規定は入っていなかったのですが、現状では努めるということになっています。

実際、行動計画をこれから作っていかなくてはならないと意識の高い自治体があり、努力規定ではありますが、積極的に推進していくというところは理解していただけたのかと思っています。

また、学校教育の中で環境教育を進めていくためには、教育委員会や学校関係者と一緒に入っていただくということが重要だというお話もあり、環境教育等推進協議会というものを設置する、設けることができるということになっております。これも、先進的な自治体ではすでに始めているというところもありますが、改めて法律にもこのように規定をしたということになります。

また、各主体の方がこのような行動計画をもしも作らないと言ったような場合には、素案を作成し提示をして、地方公共団体が作成するか否かをしっかりと公表しないとイケないことも定められています。

学校教育等における環境教育に係る支援等、第9条ですが、今回の改正で抽象的であった規定をより詳細化したということがあります。学校と各民間団体、企業とどうコミュニケーションを図って、質の高い環境教育を充実していくのかということがポイントとして規定されております。皆さまも今後このような法律もあ

るということで、機会があるときには示していきながら、連携体制を取っていただければと思います。

また、授業に活かす環境教育というものがありまして、これも環境省のHPでダウンロードできるのですが、各教科にどういったような関係性があるのかを示した文部科学省と一緒に作ったものです。新しい学習指導要領にも準拠しておりますので、ご活用頂ければと思います。

その他、今回は、環境教育支援団体の認定を国が行う、また、人材認定等事業に協働取り組みのファシリテーターの認定など教材開発の認定等を国が行うことも新しく追加されております。

最後に、この法律を各民間団体の皆さまと行政が一体となって協働の取り組みを進めていくことによって、より良い政策が出せるということが、この法律の精神だと思います。是非みなさん、この法律をご覧いただき、こういった活動の仕組みがあるということを我々にも教えていただき、少しでも環境教育の推進に役立ててもらいたいと思っております。非常に簡単ではありますが、以上で説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

2-2 「JEEF 虎の巻 ～活用術お教えします！～」

司会：(公社)日本環境教育フォーラム 京極 徹

全体会の第2部、タイトルは「JEEF 虎の巻～活用術をお教えします～」ということで、是非この機会に日本環境教育フォーラムを覚えていただければと思っております。JEEFとは、Japan Environmental Education Forumの略です。清里ミーティング自体はキープ協会や、ボランティアスタッフなどのたくさんの

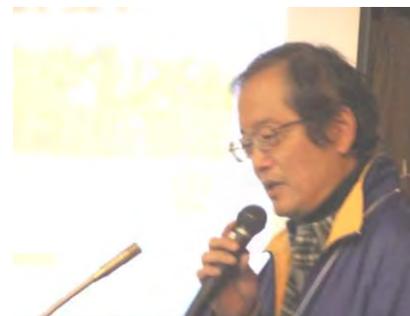
方にお世話になりながら運営していますが、事務局のJEEFってどんなことをしているのか、最新のトピックスや、活用術につままして簡単ではありますが、短い時間を使ってご紹介させていただきますので、どうぞ宜しくお願い致します。

1. JEEF 最新トピックス紹介

事務局長 林田 悦弘

ご来場の皆さま、協賛企業の皆さま、お集まりいただきましてありがとうございます。私は事務局長の林田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。最新のトピックスなど簡単に述べさせていただきます。まず、「環境省エコツアーリズムガイド育成研修」がついに始動しました。また、今話題のボタンにて、「ボタン・エコツアーリズム開発」として、ポブジカというところにおけるエコツアーリズムの開発を行っています。

その他、地球環境基金のスタディツアーでは、インドネシアに私どもから1人派遣をしております、現地事務所では様々なプログラムを行っています。また、未来の環境リーダーを目指すアジアの大学生、大学院生、若手社会人を対象とした「アジア環境リーダーネットワーク」プログラム。今年はシンガポールで実施されます。日本を含む計7カ国の参加者が、自ら環境に関するプロジェクトを企画・実行するものです。



次は、「環境教育プログラムの長期的効果の検証」ということで、NEC様と森の人づくり講座を16年実施しています。長期的な効果の検証というものを、アンケートを使って実施しました。回答数の65%が現在環境関連の仕事に従事しております、90%が環境分野と何らかの関わりがあると回答しております。16年間やってきて、我々のやってきていることは決し

で間違っていなかった、正しかったと立証されました。

次に、ツバルからの留学生のティロウさんですが、今高校生で大学進学に向けて準備中です。進学が決まりましたら、サポートの方を引き続き、または、新規でサポートをしたいという企業の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくをお願いします。

最後に、普通会员の皆様様に朗報でございます。今年の6月に公

益社団法人になりまして、内閣府に申請しましたので税額控除が適用になりました。正会員の方は社員ということで対象外になりますので、個人の普通会员に方が限定で、税額控除が受けられます。以上、簡単ではありますが、JEEF 最新トピックスとして事業の一部をご紹介します。ありがとうございました。

2. JEEF120%活用法

企画部長 塚原 一恵

ここからは、活用術ということでご紹介させていただきます。まず、参加者のみなさんは、JEEF の会員になられたこともありまして、1年間、来年の清里までではなく、それまでにネットワークから本当のワークにつながるような形で皆さんとお付き合いさせていただければと思います。様々な会員特典がありまして、まず、環境教育を学びたい、実施したいという方につきましては環境講座・ワークショップへの優待というものがございます。今年で19年目を迎える市民のための環境公開講座、場所は新宿になってしまうのですが、無料で参加することができます。来年も20周年ということで素晴らしい企画が待っておりますので、是非ご参加ください。そのほか、各種ワークショップ・セミナーへご優待をさせていただきます。

そして、各種書籍の割引販売。ここに来たのはいいけれど環境教育が解らない、幅が広いなという方もいらっしゃいますよね。あとは、自然学校の参考書籍もございますけれど、どれも割引価格で販売させて頂いておりますので、私どものHP、もしくは清里のJEEF ショップコーナーへお立ち寄りください。

あと、GEMS というプログラムがありまして、これをちょっと聞いたことがある人はどのくらいいらっしゃいますか。3分の1くらいの方がご存じということで。カルフォルニア大学バークレー校で開発された科学と数学の体験学習型カリキュラムということで、小学生から高校生まで、使いようによっては低年齢まで使えるものなのですが、こういった教材を中心としたカリキュラムを翻訳し、使って教えるリーダーを育成するという事業を実施しております。JEEF 会員の方は書籍、研修ともに通常価格よりも10%割引となっております。さらに、今回の清里では3割引のお安い価格で販売しておりますので、宣伝続きで申し訳ございませんが、こちらも是非お手にとってください。続きまして、京極の方が本日行いました生物多様性まんだらカードゲームといった環境教材も各種開発しております。こちらは無料で配布しており、インターネットやFAXからも申し込みますので、是非お申し込みください。また、普及して下さる方には謝金もご用意しておりますので是非、ご覧ください。

また、有料になってしまうのですが、環境経営戦略ゲームを従業員研修という形で、経営戦略を学ぶ、環境を使った環境経営戦略を学ぶゲームを実施しております。詳しいことは、お問い合わせいただければと思います。これから会員の皆さまへはメールマガジンや、機関誌をお届けさせて頂くのですが、ただ受けている

だけではどうしてもつまらなくなってしまいます。ですので、是非、情報を発信をしてください。例えば、「地球の子ども」への情報をいつでもお待ちしております。それと、身近メールも約3000部配信されておりますので、是非ご活用ください。このあたりの詳細が分からない方はウェブを通じてメールをいただければと思います。それから、自然体験イベント情報というものを登録していただけるページがありまして、ここから環境省の自然大好きクラブのHPにリンクが反映されるようになっていきます。こちらはまだの方は、是非使ってみてください。フェイスブックなどSNSは今年になって始めたのですが、お陰様でどんどん増えている状況です。お戻りになられたら「いいね」ボタンを押していただければ幸いです。あとtwitterはハッシュタグをつけておりますので、環境関連の情報を発信したいという方は、私どものページをうまく使っていただきたいと思っております。あとは、プロジェクトに参加したいということで今年からボランティア募集を開始しました。実際、翻訳関係や事務作業の部分でお手伝い頂いております。こちらもHPから登録していただけますので、ぜひご覧ください。

それと、後程紹介するのですがJEEF 学生部というものが立ち上がりました。希望者はOJTにもご参加いただけます。

最後に、これだけは覚えて帰ってもらいたいのですが、是非一緒に取り組んで、何かを開始できたらなと思っております。色々あるのですが、今回は新しいタイプの事例ということで紹介させていただきます。これまで、色々な企業様にサポートいただいたコラボレーション事例のお話も申し上げているのですが、今回は、HIS様とコラボレーションをして来年、2012年春からプロジェクトを開始します。途上国のスタディツアー・エコツアーということでかなり長くやっているHIS様ですが、こちらと私どもが融合して国際環境教育プログラムとして提供するというものです。エコツアーだけではなく、事前学習や事後発表、希望者の方には論文指導というものを含めてトータルにご提供していくようなものになります。これは、ビジネスモデル的には共同開発ということで、どちらの懐も痛まないようなやり方でやらせて頂いております。是非ご参加いただければと思います。

それから、セミナー・勉強会の実施。このあたり、以前清里ミーティングに参加したことがある方から、もう少しライトなセミナーや勉強会を、清里だけの集まりではなく開いたらどう

かという提案をいただいております。

昨年度は一般企業向けの賛助会員セミナーというものを開催させて頂いて、また、社内で北野日出男先生をお招きして勉強するような機会を設けております。あと、テスト的ではあるのですが、みなさんとコラボレーションをして、一般向けのセミナーを開発するとか、あるいは無料のところからトライアルをしていくことで、みなさんのスキルアップを計っていくということもできるかと思っておりますので、色々アイデアを頂ければと思います。

また、本や資料などを探したいというご要望もお電話を頂ければと思います。このあとは、学生部の取り組み事例を紹介させて頂きます。長年、清里には若い人の集まりが欲しいとの意見があったのですが、なかなか実現できずにいました。そんな中、日向さんが、まだ大学3年生なのですが、「私やりたいです、私やりたいです。」と自ら言ってくれました。本当にこういうことは素晴らしいと思います。ですので、是非生れたばかりですが、1つの事例としてご覧いただければと思います。ありがとうございました。

3. JEEF 学生部紹介 学生部（日向有美、小林真人、垂水恵美子、加藤超大）

日向：みなさん、こんばんは。私たち学生4名から JEEF 学生部の紹介をさせていただきたいと思っております。まず、JEEF 学生部を知っているよという方はいらっしゃいますか？ありがとうございます。知らないという方が大勢いらっしゃると思いますので、是非、この機会に知っていただき、広めていただければいいなと思います。まず、自己紹介をさせていただきます。私は、立教大学3年の日向有美と申します。

小林：淑徳大学4年生の小林真人と申します、宜しくお願い致します。

垂水：大妻女子大学大学院修士2年の垂水恵美子と申します、宜しくお願い致します。

加藤：立教大学4年の加藤超大と申します。宜しくお願い致します。それと、あと女性で、桜美林大学3年の長野美彩さんも入れて5人で活動しています。

日向：あらためまして、JEEF 学生部とは、JEEF でインターンを行っている、また、行っていた環境教育に関心のある学生同士が、ネットワークを作りたいという思いから、このプロジェクトを開始しました。次に、JEEF 学生部のビジョンですが、目指すものは「つなぐ」と「つたえる」の2点です。まず、「つなぐ」ですが、これは学生同士のネットワークの中心として、もっともっとたくさんの学生に環境教育を広めていきたいなという思いがあります。もう1点の「つたえる」ですが、学生目線で環境教育を考え、JEEF の憲章にもある「人と自然」「人と人」「人と社会」を学生目線で実践し、社会に発信していきたいと思っております。まず学生部企画第一弾として交流会を開催しましたので、こちらについて小林から紹介させていただきます。

小林：私たちの最初の企画「JEEF 学生交流会」を11月11日に開催しましたのでご紹介致します。JEEF 学生交流会の目的は、環境教育に関心のある学生をつなぐと、そして、環境教育の範囲の広さを知ってもらおうという目的で企画しました。当日は、環境教育推進法の定義を共有し、6人1テーブルで「あなたが思う環境教育とはなんですか」「環境教育と聞いて何を思っていますか」というテーマのもとディスカッションをしました。実際、開催したところ、様々な経験を持つ方が集まりました。



例えば、自然学校でたくさん活動をしている人、環境の調査を経験している人、環境の啓発活動を行っている人、まったく環境教育を知らない人もいましたし、1名ウクライナからの参加者もあり、グローバルで幅広い方々が参加されました。みなさんが考える環境教育の感覚もまったく異なり、自然への興味の扉を開くや、国際社会における生き方の獲得、地域活性化、持続可能な社会実現に向けた普及啓発活動といったように、環境教育の幅の広さを知ってもらう良い機会になったのではないかと思います。

垂水：当日の参加者からは、新しい出会いがあって良かった、環境について語り合う機会が少なかったのでこのような機会があって良かったといった意見をいただいたのですが、今回の清里ミーティングにも何名かの参加者がいますので、生の声を聞けたらと思います。白井君よろしくお願ひします。

白井：僕も環境教育活動を地元で行っているのですが、他に環境教育活動をやっているという仲間がいるのだろうかと思い、JEEF 学生交流会に参加しました。自然学校で活躍されている方やインタープリターをされている方、生物調査や環境保全、色々な分野で環境教育に携わっている学生同士が環境教育について語るディスカッションを行い、それが僕の中では斬新で、発見に満ち溢れていました。というのは、色々な視点を学生も持っているので、気づきや共感も生まれて、また、みんなで一致団結して、環境教育を若い力で盛り上げられるのではないかと良い雰囲気の間でした。そのあとは、飲みニケーションもさせていただき、有意義な時間を過ごすことができました。

垂水：ありがとうございました。はじめて学生だけで企画、運営したため、いろいろな反省点もありました。企画書の作成が大変で何度も書き直したのですが、なかなか企画が通らず、原点に戻り、私たちが本当にやりたいことはなんだろうと考え直し、今回の学生交流会という形になりました。色々講師を呼んでみよう、凝ったワークショップをやってみようなど案は出は企画倒れになってしまったので、また次回に活かしたいと思います。集客も人が集まるのか不安だったのですが、募集人数いっぱい集めることができました。大変だった反面、良かった面もありまして、企画を進めるにあたって学生部のメンバーも環境教育の基本的なことについて勉強するいい機会になったと思います。交流会で熱く語れたこともいい機会になりました。参加者からは、またやりたいという声を聞き、本当に嬉しかったです。続いて、今後の活動について発表します。

加藤：今後の取り組みについてお話します。まず、パンフレットの裏に学生部通信という手書きの新聞があるのですが、これを学生部のメンバーで毎月活動報告など掲載して発行していこうと思います。なんで、手書きかというと、清里ミーティングでは数年前までその日の報告を書いた手書きの新聞を配っていたという

のをヒントにして、手書きにしました。これを学生部のブログにアップしていこうと思います。また、これからやりたいと考えているのは、自然学校に行く企画を立てたいと考えております。そのほか農業やアウトドア体験、あと1番やりたいと考えているのは、学生間のネットワークが構築されていないので、学生版の清里ミーティングを新宿で開きたいと思います。しかし、僕たちだけではできないと思うので、ここにいる参加者の皆さま、企業、NPO、NGO、行政たくさんの方がいらっしゃいますので、お力を貸していただき、これから一緒に取り組んでいけたら良いなと思っています。こんな学生部ですが、これからよろしくお願ひします。**京極**：学生部は立ち上がったばかりなので、是非みなさん優しく見守っていただければと思います。最初は、東京を中心とした活動になると思いますが、少しずつ全国に名を広げられればと思っています。最後に、私ども事務局として会員の皆様さまに何かサポートをさせていただきたいと思っておりますので、色々な機会を見つけてですね、ご意見、ご要望をいただけたらと思います。貴重なお時間、どうもありがとうございました。



オプションプログラム

◆環境教育プレゼンテーション

1日目:11月19日(土)夕方/新館ホール、本館ホール、アンデレホール、ハンターホール

1日目:11月19日(土)夜/新館ラウンジ、本館ホール、アンデレホール、ハンターホール

2日目:11月20日(日)夜/新館ラウンジ、本館ホール、アンデレホール、ハンターホール

◆早朝ワークショップ

2日目:11月20日(日)早朝

- ◆ゼロからの火起こし術
- ◆森林療法的プログラム体験～樹林気功と運動療法
- ◆冬鳥と出会って、いのちを感じる
- ◆キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

◆当日募集ワークショップ

3日目:11月21日(月)午前

- ◆地球の願いに耳をすませる
- ◆～木育プログラム～ 白川郷伝統工芸体験「ヒデ細工」
- ◆森ヨガ(ヨガと瞑想の体験ワークショップ)
- ◆目からウロコがおちるエネルギーの話
- ◆整体師に学ぶ心と体の癒し方～明日から頑張ろう～
- ◆子どもの環境教育を保障する平和教育の視点
- ◆自然と災害 先人の叡智を神社から学ぶ
- ◆『神社が子供を育て、地域を創る』宮城熱日高彦神社
- ◆里地里山&自転車&インタープリテーションの模索
- ◆三陸復興国立公園～国立公園になにができるか～
- ◆環境教育で食べていくことにチャレンジしました！～大卒1年目の衝撃大公開～

環境教育プレゼンテーション

1日目：11月19日(土)夕方 会場：新館ホール

◆広がる自然学校のかたち～自然学校全国調査 2010 から～

実施者：中澤朋代・梅崎靖志（自然学校全国調査2010ワーキングメンバー）

内容：多くの自然学校の協力を得て、第4回目の自然学校全国調査が行われました。報告は翌年3月2日に発表されて以来、大震災の影響で休止中です。今回はその要点をもとに、現在の自然学校のかたちを参加者の皆さんと考えました。

◆親子プログラムにおける大人の参加者の意識・行動変容

実施者：井戸直樹（ホールアース自然学校）

内容：「食農」をテーマとした幼児と親向け宿泊型連続プログラム「森と畑のようちえん・森と田んぼのようちえん」。二年半に亘った本企画において、スタッフの介入が親の意識・行動変容に及ぼす影響の調査記録を発表しました。

◆森林セルフケアによるエンパワメント実現の取り組み

実施者：飯田みゆき（NPO法人日本森林療法協会）

内容：エンパワメントとは、個人が自分自身の力で課題を解決する社会的技術や能力を獲得することをいいます。森林療法にセルフケアの概念をとり入れ、ひとりひとりのより良く生きる力を引き出す取り組みを紹介しました。

1日目：11月19日(土)夕方 会場：本館ホール

◆コンポスト技術を活用したJパワーグループの復興支援

実施者：小林庸一（J-POWER）

内容：Jパワーグループでは、これまで取り組んできた環境リサイクル技術（生ごみの堆肥化技術）を活用した被災地復興支援を、社会貢献活動の一環として、岩手県にて、行政、NPO等と協働しながら進めています。その取り組みをご紹介します。

◆できることをやろう～被災地復興支援&ふくしまキッズ

実施者：齋藤学（NPO法人ねおす）

内容：震災直後の13日から岩手県釜石市に入り、拠点を構え、被災者に寄り添いながら支援活動を続けてきた8か月間の記録と「福島の子どもを守ろう」をスローガンに福島県の子どもたち500人を最長5週間、受入を行ったその活動の報告。

◆大震災を題材にしたESDテキスト 未来をつくるBOOK

実施者：村上千里（ESD-J）

内容：このBOOKは、主に被災地でない地域に住む子どもと大人が、震災を思い起こし、今を見つめ、大切にしたいことは何なのかを深く考え、探る時間に出会うために作りました。コンセプトは、答えのない「問い」と向き合う。

◆福島を元気にする子どもキャンプ。で福島を元気に！！

実施者：遠藤隼（ホールアース自然学校）

内容：震災後から「いわき市」で活動を続け、秋からは子どもキャンプで福島を応援してきました！そんな思いの詰まったキャンプの経緯と活動報告を行いました。あわせて、これからの活動パートナーも募集中！

1日目：11月19日(土)夕方 会場：アンデレホール**◆なつかしくてあたらしい里山への挑戦！**

実施者：遠藤亮・樋山和恵（柏崎・夢の森公園）

内容：年間8万人が訪れる里山公園が行っている「自然が身近にある暮らし」の魅力発信活動をご紹介します。セルフビルドの足湯・森のようちえん・自然農講座・市民による森づくりなど、なつかしくてあたらしい取り組みを紹介しました。

◆里山応援ネットワーク作ります

実施者：菅山明美（NHK エンタープライズ 里山応援ネットワーク）

内容：里山の番組がきっかけになって、ガイドシステムができて地域振興につながった滋賀県高島町針江地区の活動を例にしながら、第二、第三の針江を生み出し里山文化を守るプロデュースについて考えました。

◆那須平成の森でのインタープリテーションについて

実施者：菅原遊（那須平成の森フィールドセンター）

内容：那須平成の森は、栃木県の北部、雄大な那須連山の山麓に広がる那須高原にあります。平成20年まで那須御用邸用地として管理されていた約560haの豊かな森です。本日は那須平成の森の魅力や、展開しているインタープリテーションについて紹介しました。

◆1%支援制度で自然学校を支援しよう！

実施者：阿部達也（千葉県八千代市民）

内容：自分が払った税金を、自分の住む町の自然学校・自然保護グループ・NPOに直接投票し寄付できる市が、全国に9つあります。持続可能な地域づくり、人づくりESDにも広がって行きます。1%支援制度についてご紹介しました。

1日目：11月19日(土)夕方 会場：ハンターホール**◆八ヶ岳林業体験の事前事後学習としての環境教育**

実施者：新田啓洋（東京農工大学大学院）

内容：多摩市の小学6年生は八ヶ岳移動教室で林業体験を行います。その事前事後に総合的な学習の時間として、東落合小学校において森林環境教育を試行しています。木を知ることから始め、林業や環境まで広く教える内容です。

◆判断力を育成する環境教育

実施者：富田俊幸（石岡市立園部中学校）

内容：小学校6年生、中学校2年生を対象としたエネルギー環境教育の実践、中学校2年生を対象とした放射線による影響を判断する環境教育について発表いたします。トレードオフや放射線の影響についてどのように子どもたちが考えたか考察しました。

◆リサイクル教育とプラスチック

実施者：村山武範（竹本容器株式会社）

内容：3R、レジ袋、詰め替え製品、エコバッグ etc…簡単なようで実は複雑なプラスチック・リサイクル。プラ容器開発の最新事情を交え、今後の環境教育に欠かせないリサイクル教育について皆さんと一緒に考えました。

◆身近な公園を舞台とした自然体験イベントについて

実施者：山田哲弘（財団法人岡山市環境保全事業団 環境学習センター「アスエコ」）

内容：環境学習センター「アスエコ」では、岡山市街地の公園を舞台とした自然観察イベントを実施しています。身近な公園で楽しみながら生き物に触れあうことで、身近な自然を見つめ直し、生き物を観察する眼を育成します。「アスエコ」での活動をご紹介します。

1日目：11月19日(土)夜 会場：新館ラウンジ

◆**環境エネルギー館、徹底解剖！ここだけの話、あります**

実施者：嶋野弥名子（東京ガス（株）環境エネルギー館）

内容：開館13周年を迎えた都市型環境学習施設、環境エネルギー館。現在、10テーマ約70のオリジナルプログラムを実施、それらの企画・開発にまつわる工夫点や苦労話などを交えながら、徹底解剖しました。

◆**小学校の総合的な学習での森林環境教育②**

実施者：上尾歩未（東京農工大学）

内容：一昨年、同研究室より小学校の総合的な学習の時間で行った森林環境教育について発表致しました。今回はその続編として、東京都稲城市の小学校5年生に今年度行っている森林環境教育プログラムについて発表しました。

1日目：11月19日(土)夜 会場：本館ホール

◆**地球に暮らそう ～生態系の中で生きるという選択肢～**

実施者：加藤大吾（NPO法人都留環境フォーラム）

内容：山梨県都留市（田舎）に多くの仲間と自らの手で森を拓き、建築、移住。生態系の中で暮らす。今年は更に、地域に根付き農業／地域おこしまで、その過程を写真でご覧いただき、自然、地域、役所との関係性などをご紹介します。

◆**「山ガール」ブーム、どうするかは私たち次第！**

実施者：橋谷晃（木風舎）

内容：若い女性がこぞって山に出かける「山ガール」ブームは、私たちにとって明らかに明るい材料だ。ブームをブームで終わらせないためには、私たちがどのような受け皿をつくり、ブームをどのような方向に導いていくかにかかっているのではないだろうか。みんなで考えました。

1日目：11月19日(土)夜 会場：アンデレホール

◆**グリーン・ツーリズムの現場と環境教育～里山の未来～**

実施者：本田恭子（環境教育ネットワークとやまエコひろば）

内容：「グリーン・ツーリズムで人を呼べるか？」8年前、首都圏からなじみの薄い富山県で、農村振興・地域おこしが始まった。縦割りの行政主導と、農業に無頓着な地元との間で、どんな交流と環境教育が実現したか？そして物語の行方は？富山県の取組を紹介しました。

◆**目からウロコが落ちるエネルギーの話**

実施者：佐々木豊志（くりこま高原自然学校）、大場隆博（栗駒木材）、古川正司（さいかい産業）

内容：3.11を価値観の変革のターニングポイントにしなければならない。震災が教えてくれたエネルギー改革・意識改革をしよう。資源がないといわれてきた日本は実は資源大国だった。日本の豊かな森林資源からエネルギーを取り出すことで、環境にも、経済にもプラスになること、これからの持続可能な社会の実現に有効な方法のひとつを知りましょう。森林資源を活用した木質ペレットの可能性を伝えました。

1日目：11月19日(土)夜 会場：新館ハンターホール

◆**自然系ファシの小ネタの宝庫「旧暦」…の超入門講座**

実施者：齊藤透（月の会）

内容：きちんと教わったことがない⇒よくわからない⇒迷信・オカルトと誤解される旧暦。実は、科学的な時間・空間の把握システムで、宇宙船地球号であることを日々体感できるスグレモノ。環境に携わる人の基礎知識であると同時に、文化・風土のいたるところに溶け込んでいるので、興味を引く小ネタの宝庫でもあります。その旧暦について詳しく説明しました。

◆星空を見て、いのちを考える

実施者：安西英明（日本野鳥の会）

内容：3, 11 以後、「インタープリターは何を伝えるべきか」を意識した夜の観察会を実施。今後のインタープリターとしての活動をみんなで考えていきました。

2日目：11月20日(日)夜 会場：新館ラウンジ

◆小岩井農場のエコファームの紹介

実施者：渋谷晃太郎（岩手県立大学）

内容：小岩井農場では、昨年からは畜産、林業、自然体験などを複合的に行うエコファームが開始されました。企業が行う環境教育として興味深いのでご紹介しました。

◆里地里山ポタリングでECOライフの裾野を広げる

実施者：坂本均（ノーム自然環境教育事務所）

内容：社会問題化しているストレスに対処すべく、里地里山での自転車を利用したインタープリテーションは環境教育を「健康」という視点で捉え、新しい層への「広がり」の可能性が高いのではないかと4回のツアーから感じたことを発表しました。

2日目：11月20日(日)夜 会場：本館ホール

◆キャンプでニッポンを元気に！夏休み子ども元気村

実施者：白井健（NPO法人千葉自然学校）

内容：地元三銀行にご協賛いただき、千葉県内に避難してきた子どもたち、千葉県内で被災した子どもたちを無料でキャンプに招待し、心のケアとたくましく生きる力を育むことを目的に開催した「夏休み子ども元気村」の取組をご紹介しました。

◆トヨタの森流「ワンダーパワーで感じよう！」

実施者：池上博身・伊吹あゆみ（トヨタの森）

内容：ワンダーパワーって何だと思いませんか？実はみなさんが持っているパワーです。このパワーを使うと森歩きが100倍楽しくなって、ずっと心に残るんだって。今回は私達が小学生と森を歩く前にいつもしているお話を実演しました。

2日目：11月20日(日)夜 会場：アンデレホール

◆エコ印刷ってなあに？環境系団体は印刷にも環境配慮を

実施者：齊藤透（エコ印刷研究会）

内容：3年連続でエコ印刷大賞を受賞しました。エコ印刷に費用はかかりません。でも、印刷業界にさえ、エコ印刷をきちんと知っている人はほとんどいません。それは発注者がコストと納期しか問わないからです。発注者がエコを問えば、業界が変わります。その取組を紹介しました。

◆ヨセミテ国立公園キャンプ

実施者：西村仁志（環境共育事務所カラース）

内容：1995年以來毎年、ヨセミテを訪れ、またたくさんの方々をご案内してまいりました。環境共育事務所カラースの17年に渡るヨセミテキャンプの歩みについてご紹介しました。

2日目：11月20日(日)夜 会場：ハンターホール

◆行動につながる環境教育のためにできること

実施者：梅崎靖志（風と土の自然学校）

内 容：自然体験型環境教育を実践する時、単なる体験や意識の変化で終わらずに行動につなぐためにはどうするか？実践者と参加者へのインタビューの結果から導き出されたポイントをご紹介します。

◆野営大学生～森から通う大学生活への挑戦

実施者：佐藤洋（都留文科大学グローワイルドライブサークル）

内 容：子どもたちと野生動物の暮らしに迫ったり、森で遊び暮らしを営むことを通して、自然と人ときあっていく感覚を育てています。春のこどもキャンプに向けて今考えているのは…森での暮らしをつくりながら大学に通う、“野営大学生生活”への挑戦！です。

早朝ワークショップ

2日目：11月20日(日)7:00~8:00

◆ゼロから始める火起こし術

実施者：遠藤 隼（ホールアース自然学校）

寒い朝に一番欲しいのは「火」。あたり前に火が手に入る時代だからこそ、朝から原始的な方法で火起こしに挑戦したワークショップ。3チーム+学生ボランティアチームの計4チームで始まった火おこし。マッチやライターは一切使わずに木材と人の動力による火起こしが行われた。なかなか火がつかないことに各チーム悪戦苦闘がありましたが、約10分後、あるチームから「ついた！」の音が聞こえ、それを筆頭に続々と火がつきます。参加者の皆さんは、人類が火を最初に手にしたときのような喜びを味わっていました。

◆森林療法的プログラム体験～樹林気功と運動療法

実施者：飯田みゆき（NPO 法人日本森林療法協会）

外に出て自然の中で行った。まず、森に入って行き、自律神経についての解説。そのあと実際に自然を感じながら、体を動かすワーク。森を感じ、木になった気持ちで、ざわざわと木が風に揺れる様などを体で表現。参加者は目を閉じ、耳をすませて、体全体で森を感じている様子がうかがえた。

最後には景色の良い展望スペースまで歩いてから、帰り道は早歩きで森を歩いた。こうして、森の中で軽く体を動かすことで、心が無心になり、癒しの効果を得ることができた。

◆冬鳥と出会って、いのちを感じる

実施者：安西 英明（公益財団法人日本野鳥の会）

3, 11 以後、「インタープリターは何を伝えるべきか」を意識した朝の観察会。インタープリターとして、どのように、何の情報を伝えるのが大切なのか。実際に朝の冬鳥の観察をしながら考えていくワークショップ。

◆キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

実施者：岩淵真奈美（財団法人キープ協会）

野生動物研究者と企業との協働で作成された、樹上性の動物たちの命を守る橋「アニマルパスウェイ」を見学するツアーである。

アニマルパスウェイまでの道のりは、遊歩道を通り朝の森の雰囲気を楽しんだ。道の途中では、シカの樹皮の食べあとや小動物の糞などのフィールドサインを見つけ、鏡を使ってヤマメの視線を体験するアクティビティをして楽しんだ。

当日募集ワークショップ

◆地球の願いに耳をすませる

実施者：帖佐 仁美（ビーネイチャースクール）

参加者が少人数だったこともあり、リラックスした雰囲気ワークショップがはじまった。清里に来て印象に残っていること、世界のなかで気になること…自分の身の回りや、世界で生じていることに対して、自分が感じていることを参加者同士で共有した。そのあと外で一人になり自然を感じることで、地球が何を言おうとしているのか、率直に聞こえたもの、感じたものを言葉にしていって。形にこだわらず、自由な意見を出しあう、いきいきとした参加者の姿が印象的であった。



◆～木育プログラム～ 白川郷伝統工芸体験「ヒデ細工」

実施者：黒坂 真(NPO 法人白川郷自然共生フォーラム)

ヒデ(木を薄く削いでテープ状にしたもの)を使って小さなカゴを作るプログラム。ヒデ細工は白川郷に伝わる伝統工芸で、昔はどの家でも囲炉裏を囲んで作られていたのですが今はほとんど作られなくなっています。白川郷の合掌造りの“はり”が自然素材を見極めて作られているため今でもしっかりと残っているように、ヒデ細工にも自然を利用する知恵が生きています。ヒデを20本使ってカゴの底の部分から作り、途中はお湯につけて木を曲げやすくしながら編んでいきました。針金の輪をカゴの口の部分に編み込んで完成です。参加者の皆さんは、わいわいおしゃべりしながら手も動かして、個性あふれる作品を作っていました。



◆森ヨガ(ヨガと瞑想の体験ワークショップ)

実施者：並木 秀幸（スズアカ）

まずは室内で簡単な座学を行い、その後は屋外の芝生の広場へ移動。くつ、くつ下、コートを脱いで、ヨガのポーズ。なんて贅沢な時間でしょう・・・！！芝生に敷いた麻布から感じる大地の鼓動、頬を伝う冷たい風、自然を全身で思いっきり感じながら、参加者の皆さんはヨガを満喫していました。1時間ほどヨガを行い、その後は室内に戻り、暖かいお茶を飲んでゆっくりしてから「瞑想」を行いました。多様な情報化社会の中で、自分自身と闘い無になる。普段の生活では味わうことの出来ない、経験だったことでしょう。



◆整体師に学ぶ心と体の癒し方～明日から頑張ろう～

実施者：村井 孝一（株式会社生態計画研究所 早川事業所）

肩こり、腰痛などの治し方や、そもそもなぜ肩こりや腰痛になってしまうのか、その原因と、対処法などの説明のあと、実際に様々な体勢になり体を伸ばし、正常な体に近づける整体法を実践し、食や意識から体を整える整食法と整心法を参加者は学んでいました。



◆子どもの環境教育を保証する平和教育の視点

実施者：橋口 直幸 (NPO 法人こどもの森ネットワーク)

福島の子どもの外遊びの現状を説明。参加者のみなさんと「環境教育」と「平和な社会」についてディスカッションを行い、接点を共有した。様々な意見が飛び交い、これからの活動に活かしていける場となりました。



◆里地里山&自転車&インタープリテーションの模索

実施者：坂本 均 (ノーム自然環境教育事務所)

社会問題化しているストレスに対処すべく、里地里山での自転車を利用したインタープリテーションは環境教育を「健康」という視点で捉え、新しい層への「広がり」の可能性が高いのではないかと。参加者と模索しながら今後の発展にむけてディスカッションを行った。



◆自然と災害 先人の叡智を神社から学ぶ

実施者：渡邊 剛 (神社本庁震災対策室)

歌手の松任谷由実が伊勢神宮を訪れるラジオ番組を聞き、震災後の日本人の心のあり方を、伊勢神宮の森を通して考えることから始まり、風の音、鳥の鳴き声、葉のこすれる音などがBGMとなり、日本人は自然と共存して生きてきた。東日本大震災の際、津波の到達点に沿うように神社がありそのほとんどは本堂まで津波が達することはなく、先人たちの経験に基づいて神社がつくられていたのだという理解を深めた。



◆目からウロコがおちるエネルギーの話

実施者：佐々木豊志(くりこま高原自然学校)

大場隆博(栗駒木材株式会社)

日本は森林大国であるが、現在、林業は衰退し、森林の荒廃が進んでいる。この豊富な森林資源を昔のようにエネルギー資源として利用することで、森林を再生させるだけでなく、林業が活性化し、雇用の創出に繋がる。また、震災等の経験から、エネルギーを地域で自給する必要がある。木質ペレットやペレットストーブなど自然エネルギー使用事例を紹介し、学習を深めた。



◆『神社が子供を育て、地域を創る』宮城熱日高彦神社

実施者：黒須 貫 (宮城熱日高彦神社 神主)

佐藤 洋 (都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター)

宮城県角田市に1900年の歴史をもつ神社があります。小さなことからコツコツと社務所建築を始めたところ、3.11の大震災がおきました。これからの神社の担う役割と、その実践について参加者と話し合い、実情を共有し、理解を深めていった。



◆三陸復興国立公園～国立公園になができるか～

実施者：番匠 克二(環境省)

はじめに、三陸海岸の概要や自然環境についての説明。次に、復興に向けた具体的な取組として「三陸復興国立公園（仮称）」の話をし、新たな国立公園づくりのポイントとして従来のものとのテーマの違いについて説明を行った。参加者全員で背景の共有が行われた後は、ハード面・ソフト面から復興に向け、より良い国立公園づくりのための案を参加者各自で考え発表し終了しました。



◆環境教育で食べていくことにチャレンジしました！

～大卒1年目の衝撃大公開～

実施者：川崎 倫 (NPO 法人都留環境フォーラム)

学生からNPOへ就職。しかしたくさんの壁があり、環境教育で食べていくこと、学生と社会人の壁、自分という壁があった。それらのすべてを参加者へさげ出し、皆さんとの理解を深め、環境教育で食べていく道をそれぞれが意見を出し合い、考えていった。



◆やってみよう！ファシリテーショングラフィック

実施者：遠藤 亮(ホールアース自然学校)

まずは実践してみることが第一なので、参加者1人につき横造紙1枚とカラーペン1セットを使用し、実施者の話す内容を文字・大きさ・色づかい・書く場所・バランス・イラストなどあらゆる工夫を施しながらまとめていきました。途中途中で実施者から参加者へアドバイスやコメントをしつつ、参加者同士も横造紙を見せ合いながら進めていったので、参加者も徐々に慣れいくことで楽しみながら参加できていました。



3 日目

全体会 3・閉会式

司 会 : NPO 法人都留環境フォーラム 加藤 大吾

都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター 佐藤 洋

全体会 3

椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション

閉会式

司会・総括 : (公社) 日本環境教育フォーラム理事 中野 民夫

3 日目 全体会 3

司 会： NPO 法人都留環境フォーラム 加藤 大吾

都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター 佐藤 洋

佐藤：全体会を始めさせていただきます。宜しくお願いします。今から何をするかと言いますと、「椅子取りゲーム式全員参加型ディスカッション」を行います。まずは、世代、所属団体など多様な5人組を作ってください。ポイントは「多様な」です。次に、ルールを説明したいと思います。これから質問を全部で2問出しますので、その答えを個人で書いていただき、5人グループの中でそれぞれ発表してください。その次に、ぜひ全員の前で発表すべき意見だというものがありましたら、椅子取りゲーム方式で、先着順に前で発表をしてください。イスが5個あります。前に出て来た方は、キーワードを見せながら発表してください。



椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション

第 1 問

今回の清里ミーティングで印象に残っていることは？

「子供連れの参加者が数組」

発表者： 藤村 哲さん

今回は子ども連れの参加者が数組参加されていました。私のところは 11 ヶ月の娘がおります。託児所を設けていただき、ありがとうございました。今も預かってもらっていますが、来年以降、ここにいる皆さま30代、40代、小さなお子様がいらっしゃる方も多いと思いますが、是非お子様を連れてきて、子連れでワークショップなどできたら良いなと思いました。

「受けたもう」

発表者： 齊藤 透さん

ワークショップで体験した修験道で、何を言われてもこう言って答えないといけない。「受けたもう」。これで、答えないといけないのです。何を受けても、それを受けるということが印象に残っています。是非、今日この後、皆さんやってみてください。

「世の中にはすごい人がたくさんいる！！」

発表者： 八木 宏幸さん

僕が思ったのは、世の中にはすごい人がたくさんいるということ、身を持って実感しました。やはり、今の日本はTPPへの参加など、本当に大丈夫か、と不信や不安に思うことが多く、ついつい大学の友達と暗い話をしてしまうのですが、この場に来て様々な参加者の方と話し、被災者の子どもたちや、福島の子もたちと遊んで、子どもたちに夢を与えられたんだという話や、色々素晴らしい話を聞いて、世の中にはまだまだすごい人がたくさんいるということに気づきました。僕たちが落ち込んでいる場合ではないと改めて感じました。本当にありがとうございました。

「熱意」

発表者： 澤野 崇さん

1番印象に残ったのは、参加者皆さんの熱意なのではないかと思いました。最初2泊3日のプログラムを見て、かなりタイトなスケジュールだったので、2泊3日もこんなにやれるのかなと思っていたのですが、実際に受けてみると、夜の懇談会もそうですし、朝のワークショップもそうなのですが、全然時間が足りない。もっともっと、話をしたいという方がいっぱいいらっちゃって、本当に皆さん、熱意がある人が多いんだなと1番印象に残りました。

「快適だな」

発表者：森 雅浩さん

新館トイレのウォシュレット完備と便座ウォーマーと、パブリックスペースのトイレにはしっかりとペーパータオルが付いて、ホールのハロゲンランプが印象的だったんですけども、6年ぶりくらいに来て、10年くらい前に参加した時は、「トイレの便座ウォーマーで電気を使っているのは何事か」と言って「エコじゃない」と怒る参加者がいたんです。今や、使い捨てのペーパータオルも完備するなど快適な施設ということで、エネルギー消費量が増えていくということが必然的に起きているなと真面目に感じました。



第 2 問

日本の復興に環境教育の視点からの素敵なアイデアは？

「狩猟(猟師)」

発表者：永吉 剛さん

マニアックなんですけれども、ワークショップをやらせていただき、狩猟、もしくは猟師からの環境教育ではないかと思っております。猟師というのは高齢化してきていたり、獣害があったりと色々問題がある中で、これからは自然学校の方々と一緒に環境教育をやっていければいいなと思っています。

「つながる」

発表者：橋口 直幸さん

今、子どもを放射能から守る活動に専念しています。キーワードは先ほど、環境教育と復興というものがありました。環境教育も復興も実に大きなテーマだと思います。本当に大きなつながりが必要であることを実感しました。ただ「つながる」だけでは駄目だと思っています。アクションにすぐに結びついていくスピードです。それで、みんなでつながって動かしていきましょう。2月にキープ協会でつなぐ人フォーラムがあります。この繋がりをもっと大きくできますので、是非、2月のつなぐ人フォーラムに、皆さんいらしてください。宜しくお願いします。



「技術より根性」

発表者：JEEF 事務局 林田 悦弘

有名な小惑星探査機はやぶさのプロジェクトマネージャー 川口淳一郎先生のお言葉で、最後になったら技術だとかそういうものではないんです。もう根性とあきらめない力。これがすべて物事を進めるということで科学者であっても、そういうことをおっしゃっていたと。やっぱり、我々も復興については、決してあきらめない根性で頑張ると、そうすることで、進んでいくのではないかと思います。

「おいしいものを食べる」

発表者：嶋野 弥名子さん

すでに皆さん実感していることだと思いますが、おいしいものを食べるのが活力になっていると思います。楽しい時間や、充実した時間が活力にすごく繋がると実感しましたので、「おいしいものを食べる」にしました。こうすることで、人は強く生きていけるんだなと、強く感じています。



閉会式

司会・総括

(公社)日本環境教育フォーラム理事 中野 民夫

通常は、閉会の辞を述べて終わるのですが、それではつまらないと思ひまして、今朝外に出て、日の出を見に行っていたのですが、北岳や、八ヶ岳も見えて本当に素晴らしいなと思ひました。ですので、最後に皆さんで清里高原の真ん中に出て、手をつないで輪になりませんか。そして、そのあとオプションが1つだけあります。2人1組になって、シートに横になって、ゴロンと大の字になります。そうすると、大地も感じるし、空も感じるので、すごく視線も変わって、清里を feel するのにとても良いと思ひます。今回は屋内で人と熱く話していたことが多かったと思ひますので、最後に外に出て、過ごしていただければと思ひます。ありがとうございました。



・手をつないで輪になりました。



・シートに横になって大地と空を感じました。



・空がこんなに深く、青く感じました。



・たまには外でゴロンとしてみませんか。

清里ミーティング 2011 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム

※この報告書および清里ミーティングに関するお問い合わせは下記まで。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿ビル 4F

公益社団法人日本環境教育フォーラム

TEL:03-3350-6770 FAX:03-3350-7818

URL : <http://www.jeef.or.jp/>